Tangolandia

春
2013

日本タンゴ・アカデミー会報

ー目　次ー

活気づく予感に包まれて……島崎長次郎 … 2
わたしのひそかに愛するタンゴ　Ventanita de arrabal ……高場将美 … 3
東京タンゴ・スポット回想（第２回）“ノスタルヒアス”……米山瑛子・島崎長次郎 … 7
想い出のタンゴ喫茶巡り　第７回「高田馬場“ボーカ”など」……荒川孝一 … 10
私の愛聴盤（第３回）……早川健太郎 … 12
旅と音楽と、、、中南米旅行の想い出……石濱　洋 … 16
Tango bar めぐり（第２回）Mi Refugio……町田静子 … 19
タンゴ、それはドラマ……ユリ・アスセナ … 22
ヘルシンキでミロンガとの遭遇……山本幸洋 … 25
在りし日の芝野史郎氏を偲んで……冨田　稔 … 27
芝野大兄の想い出……山本雅生 … 29
金澤蓄音器館の名物　タンゴＳＰレコード・コンサート（10/27）……松本外司 … 32
関西外大公演を聴いて（10/31）……山本雅生 … 35
エンリケ・クッティーニ楽団に歌うグロリア米山（11/22）……弓田綾子 … 37
タンゴ・レコードコンサート開催報告（12/8）……野口義征 … 39
名古屋の夜に輝いたネストル・マルコーニのバンドネオン演奏（12/13）……丹羽　宏 … 41
レコード・コンサート　ノチェーロ・ソイのＳＰ特集を聴く（12/23）……中村尚文 … 44
オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ第51回リサイタルレポート（12/26）……鈴木茂次 … 45
「ニコラス・レデスマ公演を聴く」の記（1/18）……杉山滋一 … 48
ジャズ・ファンに捧げるモダン・タンゴ名曲・名演を聴いて（3/9）……大澤　寛 … 51
N.レデスマ楽団伴奏による2013グラン・ミロンガ報告（3/16）……池永博威・大澤　寛 … 53
新・訳詞コーナー　Charlemos ……大澤　寛 … 55

活気づく予感に包まれて

会長　島﨑 長次郎

本号が発行される４月末は春もたけなわでしょう。景気は気分と言われますが、何となく日本全体が活気づいてゆく予感に包まれているようです。それにつけても東北大災害から丸２年が過ぎ、未だに帰郷が叶わぬ方々が居られることを思うと、日本全体の活力が高まり、そのエネルギーが被災地復興に向かうことを願わずには居られません。

今年の第一四半期も日本のタンゴの状況は観どころ・聴きどころの多いものでありました。本号にもそれらのレポートが掲載されています。必ず現場に足を運んで観て・聴いた上での報告です。当日本タンゴ・アカデミーでも日程（東京マラソンと重なることを避けて３月３日とした）と場所（新会場を芝のメルパルクとした）を変更して行われた今年の「全国会員の集い」は参加者総数90名。午前中のセミナーの後は“会員懇親の集い”となり、会計報告、次いで正・副機関誌の両編集長からは現状報告と今後の方針が発表されました。両機関誌を通じて全国の会員を繋ぐ絆がさらに深まることを願いつつ、どうか会員の皆さまが「全員参加」の気持ちで投稿・提案をして頂くようお願いいたします。そしてその後の懇親会では新入会員および特に遠方から参加された会員有志の紹介を行い、その後のアトラクションには生演奏に楽団「オルケスタ　チェタンゴ」の皆さんを迎えて華やかなものとなりました。今回参加されなかった方々もどうか来年はこの楽しい集いに参加され、親睦の輪を広げることに是非ご協力頂きたいと思います。

ここでお知らせをいたします。今年もＮＴＡ主宰ミロンガ（第３回）を10月中旬を目途として開催する予定です。日時・場所を決定次第、皆様にご通知いたします。関係者は過去２回の経験に照らして準備に趣向を凝らしております。どうかご期待下さい。

気候の定まらない時期が続きます。どうか皆さまご自愛下さい。

NTA ウエブ・サイトへのアクセスについて

2011年春号第45頁に山本幸洋さんの詳しい解説がありますが、まだ時々問い合わせがありますので手順を再確認します。

①「インターネット・エクスプローラー」を起動する

②http://tangoacademy.jp/ を記入する

③現れるトップページの上欄の「ログイン」「パスワードの再発行」の前者をクリック

（３－１）ユーザー名に　NTA○○○　この○○○には会員番号の３桁の数字を

（３－２）パスワード

記入すれば閲覧可能になります。

わたしのひそかに愛するタンゴ

場末の小窓　Ventanita de arrabal

高場　将美

この曲は好きな人がたくさんいると思う。わたしは、**アンヘル・バルガス Ángel Vargas（1904 - 59）**の歌を聴いて好きになったのだが、日本でこの曲が好きな人の、ほぼ全員がそうだと思う。わたしは50年あまり前にタンゴ喫茶で耳にして、好きになった。重苦しいところが少しもなくて、タンゴのリズムでずっと拷問にさらされているとき――それも快感だったが――違った空気が、バルガス（名前は後に知った）の声とともに流れこんで来て、からだが軽くなるのを感じた。歌詞のごく一部しか単語は聞き取れなかったけれど、聞こえたところはぜんぶ気持ちいいひびきで、印象ぶかかった。

最初に語りではじまるのだけれど、その部分は当時のわたしには聞こえていなかったと思う。歌がはじまって「アッ、あの曲！」と気がつくのだった。

「エーネルバーリオカフェラータ」（「待ってました！」と心の中で拍手）――バーリオは地区とか街並みのことなんだと知っていたけれど「カフェラータ」は意味がわからなかった。ほかの曲にも出てこないことばで、類推ができない。わたしは勝手に、古ぼけたカフェがある地区なんだろうと思っていた。

近年になってようやく知ったのだが、「カフェラータ」とは、ブエノスアイレスのパルケ・チャカブーコ区内の１地域の呼び名（正式な行政区分ではない）である。左写真は近年のもので、改装されているようだが、たたずまいは昔のまま。こういう、まったく同じつくりの住宅が160軒立ち並ぶ、造成住宅地区だ。

1921年に、低所得の人々に住宅を提供する、政府の「安い家」プロジェクトの一環として完成した住宅街。当時のブエノスアイレスでは「安い家」だったのだろうけれど、一戸建て（背中合わせの二戸建てもあり）の二階家で、３～４室と浴室、キッチン、中庭やテラスも付いているので、大多数の日本人（わたしを含めて）から見れば、豪邸（？）だ。

この「安い家」政策の推進者だったイタリア系代議士**カッフェラータ Cafferata** 氏の名前にちなんだ地域名というわけだ。ただし、イタリア語の正式な発音は、ほんのちょっとだが、めんどくさいので、スペイン語風に（２重子音はひとつにして）**カフェラータ**と呼ぶのがふつうで、文字も **Caferata** と書くのが一般化した。この曲の作詞者も含めて、そう書き、そう発音されて

きている。でもごく最近になっても、ネットへの投稿で、この地区にむかしから住んでいる人が、ちゃんと「カッフェラータ」と呼んでほしいなぁ……と希望していた。自分の住んでいる地名にはこだわりがあるんですね。

歌詞をご紹介しよう。ここでは、**カルロス・ガルデール Carlos Gardel（? - 1935）**の録音した歌詞にした。彼はちゃんと「カッフェラータ」と発音している「唯一の」歌手だ。たったひとつの f の音を発音するだけのことだが、それが名もなく貧しい人々を思い、ブエノスアイレス共同体の文化を尊重することなんですよ。

En el barrio Cafferata, / en un viejo conventillo / con los pisos de ladrillo, /
minga de puerta cancel, / donde van los organitos / su lamento rezongando, /
está la piba esperando / que pasee el muchacho aquel.

（カッフェラータ街にある、床が煉瓦（れんが）のコンベンティージョ（集合住宅）、かんぬき錠のついた門扉なんかない。オルガニート（手回しオルガン）たちが嘆きの歌をつぶやきながら行く――そこで、若い娘が待ちつづけている、あの若者がぶらぶら歩いてくればいいなと。）

この最後の部分にも、ガルデールが改変したところがある。原作は「**pase**（通れば）」なのに、「**pasee**（ぶらぶら歩いてくれば）」と変えている。

これは、原作のほうがいいのだけれど、ことばの韻律とメロディのアクセントが合わなくて不自然になるので（「わたしは通った」という意味に聞こえてしまう）、ガルデールが考えて直したのである。作詞者だってアクセントが合わないことは承知しているが、それでも通したのは、彼にとっては、そのことばで「なければならない！」からだ。

作詞者**パスクワール・コントゥルシ Pascual Contursi（1888 - 1932）**は、当会の「タンゲアンド」誌の連載記事「タンゴ作詞家列伝」でご紹介したが、できあがったメロディをもとに作詞する人だったので、時たま、歌詞とメロディのアクセントがずれてしまうことがある。彼に限らず、フォルクローレやポピュラー音楽の歌詞では許されることだ。

コルシーニ（上）　バルガス（下）

この曲は、**コントゥルシ**が台本を書いた芝居『**カフェラータ Caferata**』（1927年6月上演）の挿入歌だった。劇中で、この曲を歌ったのが、もうすでに大スターだった**イグナーシオ・コルシーニ Ignacio Corsini（1891 - 1967）**。彼は、7月にこの曲を録音している（**ガルデール**もほとんど同時に）。彼は（当然だが）原作どおり、pase と言っている（テンポが速いと、不自然さは少しごまかせる）。

それから20数年後に、彼に大きな影響を受けて歌手になった**アンヘル・バルガス**が、この曲を取り上げて、リバイバルさせた。これで、わたしたちはこの曲のファンになったのだが、バルガスは、ちょっと語りを加えて録音している。（原作の台本にも、歌の前に短い語りが付いていたが、バルガスはそれは採用せず、歌詞の後ろのほうの１部を、うまくことばを変えて語り、曲の雰囲気をつくりあげる）

バルガスは、編曲指揮・第１バンドネオン：**エドゥワルド・デル ピアーノ Eduardo Del Piano** の楽団で録音した（1950年10月。ステージではその以前から歌っていただろう）。構成は独自の工夫が

あるが、歌詞は原作どおり（コルシーニの歌ったとおり）**pase**で、わたしには **pasé**と聞こえてしまう。

彼と同時期に、**オスバルド・プグリエーセ**楽団の専属歌手**ホルヘ・ビダール Jorge Vidal（1924 - 2010）**も、この曲を録音した。彼は**ガルデール**派なので、そして、テンポが遅いので不自然さがごまかせないからだろう、pasee にして歌っている。この録音は、たっぷりとノスタルジックな情感で染めた演奏も、とてもいいので（短いけれど、すてきなソロが織り込まれています）ぜひ聴いてください。

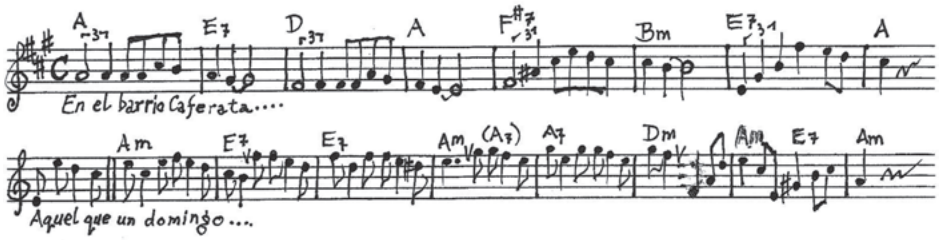
その他、わたしの覚えている範囲では（もっとほかの人たちのも聴きましたけれど）、**ルイス・カルデイ Luis Cardei（1944 - 2000）**が、バンドネオン奏者**アントーニオ・ピサーノ Antonio Pisano** の伴奏で、じっくりと語るように歌っていた。彼もpasee にしている。

この曲の作曲者は、**アントーニオ・エスカタッソ Antonio Scatasso（1886 - 1976）**。ナポリ（イタリア）生まれだそうだが、10代半ばにはブエノスアイレスで、いっぱしのバンドネオン奏者になっていた。おもに劇場（芝居小屋といったほうがピッタリくるかな）の楽団指揮者としての活動で、その世界では有名人だった。わたしたちが「ナポリ」というと連想する人柄そのままの、楽しくおかしな人だったようだ。たくさんの曲を（タンゴに限らない）、芝居で使うために書きまくり、台本作家たちが作詞して、役者たちが歌った（彼の奥さんも歌手で役者だった）。どれも１公演で使い捨ての曲なのだが、ソロ歌手たちが録音して、後々まで愛されてきた曲もいくつかある。

この『場末の小窓』がいちばん魅力的だと思うけれど、ほかにも、軽く口ずさむのにふさわしい、人の心をとらえるメロディ――いかにも「大衆の歌」といったタンゴの数々が、わたしは（たぶん、ほかの皆様も）好きだ。

なお、**エスカタッソ**は、**コルシーニ**とは親友で、いつも共演していた時期がある。そして、**ガルデール**ともたいへん仲良しだった。

歌の最初の８小節と、最後の８小節の楽譜をご紹介しよう。出版楽譜のメロディは、ごくささいなことだが、実際に歌われているものと違う個所がある。ここでは、コルシーニの歌っているメロディとフレージングになるべく近づけて書いてみた（歌手は、曲の一部では音程を消して「語る」ので、楽譜に書きにくいが）。元来コルシーニのために作られて音域が高いので、ガルデー



ルは１音下げて、バルガスはさらに１音下げて歌っている。

では、先の歌詞に続く第２部をご紹介しよう。（本題とは関係ない話ですが、今日のスペイン語の文字の使いかたでは、指示代名詞 **aquel** などにアクセント記号を付けてはいけないということになりました。ここでも、それに従っています）。

Aquel que solito / entró al conventillo, / echado en los ojos / el funyi marrón;

botín enterizo, / el cuello con brillo, / pidió una guitarra / y para ella cantó.
Aquel que un domingo / bailaron un tango; / aquel que le dijo: / «Me muero por vos».
Aquel que su almita / arrastró por el fango; / aquel que a la reja / más nunca volvió...

（……あの若者――たったひとりで、コンベンティージョに入ってきた。茶色のフンジ帽のひさしを、目にかぶるように下げて。縫い目なしの一枚革のブーツ、ワイシャツのカラーはピカピカ。ギターを借りて、彼女のために歌った。

あの若者――ある日曜日に、タンゴ１曲、いっしょに踊った。彼女に言った、「ぼくは、あなたのせいで死んでゆく」。あの若者――彼女のかよわい魂を、泥沼に引きずりこんだ。あの若者――格子窓のところにもう二度と帰ってこなかった。）

フンジ帽というのは軟らかい素材でできていて、縁の前部を下に折ってかぶるのが正しかった。一枚革のブーツ（もちろん牛革）は、革製品が安くて質が高いアルゼンチンでも高級品である。

調子いいリズムの、鼻歌にふさわしい快いメロディに乗って、歌詞のひびきがとってもいい。50年前に、ほとんど意味がわからないのに、わたしは音に魅了された。いまは意味もわかり、文法が狂っているのも指摘できるけれど、ますます好きになっている。

意味がわかった？　じつは問題点がふたつある。

ひとつは、同じ作者たち――**コントゥルシ**と**エスカタッソ**――による『**カフェラータ**』と題するタンゴとの関連だ。関係はないと考えるのが正解だろうと思う。この題名のほうは、住宅地域名ではなくて、ルンファルド（アルゼンチン＝ウルグアイの都市のスラング）で「情夫、ヒモ」のことだ。

もうひとつは大問題で、２階建ての一軒家が立ち並ぶ街であるカッフェラータ地域に、なんで貧しい移民のための最低の住居であるコンベンティージョ（１世帯が１間に住む共同住宅）があるの？？？

悩んだ末に、わたしの結論。――このコンベンティージョは、作者**コントゥルシ**の創造物で、実在はしなかった。

コンベンティージョは、没落したお金持ちの、廃墟のようになった邸宅をリサイクルして小さな部屋に割って住宅にしたものも多かった。かつての堅固な「かんぬき錠のついた門扉」も壊れて、崩れ落ちてしまったのだろう。（実際のカッフェラータ街の家には、最初から、門扉といえるような立派な入り口はない）

もうひとつの解釈が考えられる。――実際は一軒家でも、**コントゥルシ**が親しみやすく「コンベンティージョ」と呼んだのかもしれない。

いずれにしても、タンゴ『**場末の小窓**』、そしてこの曲が挿入された芝居に出てくる**カフェラータ**地域は、実在する場所と一致する面があっても、あくまでもフィクションであります。わざわざ **CaFFerata** と発音しなくてもよかったんですね。そんなイイ加減さも、わたしや皆様がこの曲を好きな理由ではないかしらん？

＊この曲をYouTube で聴きたい方は――　コルシーニ：http://youtu.be/uYINH8vHeg0
ガルデール：http://youtu.be/7Y9espTcsSY　　バルガス：http://youtu.be/vJWIoWARELY
プグリエーセ＝ビダール：http://youtu.be/H4U6533SZQU
カルデイ（ライヴ映像）：http://youtu.be/hiOiTMbC5n4

東京のタンゴ・スポット回想（2）

「ノスタルヒアス」（赤坂）

● 米山　瑛子
○ 島﨑長次郎（聞き手）

○　前回は京王プラザホテルの「コンソート」でしたが、東京のタンゴスポット回想の２回目は赤坂にあった「ノスタルヒアス」（1990 ～）ですね。米山さんは開店当初からかかわってこられたようですので、そのあたりからまずお話くださいませんか。

●　はい。「コンソート」が閉店になって間もなく、そこのお世話役だった間六三さんから“今度赤坂でタンゴの店をはじめるので手伝って欲しい”と頼まれました。私の仕事は、ショーの司会と、オーナーの間さんとアーテイストとのコミュニケーションをとることでした。場所は一ツ木通りに面し、旧ＴＢＳの真向かいのビルの５階で、以前は「アルハンブラ」というスペイン料理の店だったそうですが、経営上の問題もあって間さんと共同経営の形でスタートさせることになったようです。当初は会員制とし、入れ替え制で出演者はアルゼンチンのアーテイストに限定、一晩に３回のショー・タイムを設ける、ということでした。原則的にはトリオをメインに、ダンスカップル、もしくは歌手１名を組み合わせ、３ヶ月ないしは６ヶ月ごとの交代の形をとっていました。斬新な方針だけに間さんは大勢のお客さんが見えると、はじめは信じて疑わなかったようですが、案に相違して来店者は伸びず、会員制も、入れ替え制も途中でやめてしまいました。場所もよし、ショーも素晴らしいし、雰囲気も十分というのにどうして？と思うのですが、営業というのは実に難しいものだとつくづく思いました。そこで私は間さんに一つの提案をしました。それは店の空いている昼の時間を利用してタンゴ・ダンスの教室を開いたら、ということでした。アルゼンチンのダンサーが教えたら話題にもなり、来店者も徐々に増えるのではないか、と思ったからです。ご存知のように、直前の昭和62（1987）年に来日したタンゴ・ショー「タンゴ・アルゼンチーノ」でタンゴ・ダンスが俄然注目された折でもあり、この狙いは当たり、事実ダンスを楽しむ人々が増え、関連して夜のショーにも現れるようになったのは嬉しかったですね。今日のダンス・ブームを見るにつけ、感慨深いものがあります。

中央のＶサインを出している人がオーナーの間六三氏

○　華やかなようでも、実のところ陰にはいろいろとご苦労があったのですね。さて、出演のアーティストはどんな顔ぶれだったのでしょうか。

●　まず最初に登場したのはオマール・バレンテのトリオでした。このグループについては前回取り上げましたのでパスしますが、例の華麗なタッチのピアノのプレーは相変わらずで、常に客受けはよかったですね。次はやはりピアノの名手ホルヘ・ドラゴーネのトリオで、歌手のロサウラ・シルベストレが一緒でした。たしかバンドネオンはカルロス・ニエシでした。ロサウラは作曲もでき、ギターの弾き語りでしっとりとした歌を聞かせ、お客さんの受けもとてもよかったですね。第一美人でもあるし…。ある時のこと、間さんが「ノスタルヒアス」の出来立てのパンフレットをドラゴーネに見せたところ、ドラゴーネがえらい剣幕で怒ってしまいました。なぜならそこには２枚のロサウラの写真を載せているのにマエストロ本人の写真は１枚だったからです。まさに仕事上のジェラシーだと思いました。そのためにこの後のショーでのロサウラのナーバスぶりは大変なもので、気の毒というか、本当に可哀そうでしたよ。

バンドネオンの“ニコリート”ことニコラス・パラシーノも印象に残る人でしたね。ラテン気質そのものの人柄で、とても明るくユーモアに富んでいて、ひっきりなしに“ピロポ（特有のひやかし）”を従業員に言うので間さんに注意されていました。彼は1973年のフランチーニ＝ポンテイエル楽団の来日メンバーで、ポンテイエルとはとても仲がよかったようで、着ていたタキシードはポンテイエルのものだと語っていました。そういえばフラ＝ポンの来日メンバーには今をときめくネストル・マルコーニや故オマール・バレンテ（当時はオラシオ）がバンドネオン陣を固めていましたね。

○　そのなかにはふり返るのも辛く、悲しい思い出になったアーテイストもいるとか…。

●　そうです。途中でパラッツオというピアニストが来日しました。私はその頃来日したミュージシャンにタンゴの歌を習っていました。たとえば、ドラゴーネ、バレンテ、ルーベン・ナセル、などでしたが、パラッツオにもお願いして何度かレッスンを受けましたが、そのうちなんとなく忙しくなってしまいそれもできなくなったとき、“教えてあげたいのだが、ごめんなさい”といわれ、なんと気遣いのある方だなと思ったものでした。ところがある夜に店に行くと、間さんから「彼は今朝緊急入院した」と知らされビックリしました。でも周囲は２～３日で退院できるだろうというので安心していたところ、その夜、急変の知らせが病院からあって、そのまま亡くなってしまいました。私は父を亡くしたばかりだったので辛くて、葬式には参列できませんでした。日本に来るまではアルゼンチンから一度も出たこともない方が、はじめての旅で亡くなるなんて、きっとご夫人は信じられないだろうと、胸の痛くなるような気持ちになりました。そこで私は知人に頼み火葬の前にご本人の結婚指輪をはずしてもらい、故国のご夫人に渡して欲しいとお願いしましたが、後でそれが叶いご夫人がとても喜ばれたと聞いて、本当にホットしました。

この穴埋めに時間がかかる関係で、一時的に岩﨑浤之さんで急場をしのぎましたが、この頃から次第に本場のアーテイストが少なくなり、逆に京谷さんや志賀さんなど日本人の出演も増え、経営面での厳しさがそこはかとなく漂うようになりました。

○　アルゼンチンからアーテイストを呼び、それらをペイするための集客を維持し続けるというのは大変なことに違いありません。よくぞ４年間も頑張ったものですね。

●　オーナーの間さんは、何かといわれた人のようですが、私には優しく、とても気を遣ってくださる男気のある方でした。毎月赤字続きのタンゴの店を、愚痴も言わずに４年間も継続するというのは並みのことではなかったはずです。最初は「コンソート」でシャンソンのショーを手がけ、永田文夫さんともお馴染みになり、やがてタンゴに執心するようになったようで、お客さんに喜んでもらうことに情熱を燃やし、遂にはタンゴに文字通り命を懸けるまでになりました。実は体調不良が続いていたのです。

そんなある日、当時店に出ていたオマール･バレンテと私は、間さんのご自宅に呼ばれました。そのとき告白されたのです。医師から“余命は半年”と宣告された、ということを。そして、言うのです。“これは他言しないで欲しい。最後までお客さんを大切にしたいから”と。これには息を呑み、言葉を失ってしまいました。本人の無念さは計り知れないものがあったに違いないけれど､それを伏せたまま､本当に半年後に静かに黄泉の国に旅立って行かれました。平成２(1990)年の開店からおよそ４年半、ずっとお側で手伝ってきた私にとっても、悲しいできごとで、改めて忘れがたい歳月だったことを噛みしめています。間さんのタンゴにかけた熱い情熱と、ひたむきな行動に敬意を表しますと共に、この間に頂いた数々の想い出に心からの感謝を申し上げたいと思います。

○　たしか、かつて日経新聞の文化欄でタンゴへの思いを述べておられましたが、タンゴ普及のために燃え尽きた人物のお一人として、記憶にとどめておくべき方ですね。では最後に「ノスタルヒアス」出演の概観を、改めてどうぞ…。

●　［ピアノ］　ホルヘ・ドラゴーネ、オマール・バレンテ、ルーベン・ナセル、ロベルト・シカレ、パラッツオ、マルテイネス

［バンドネオン］　カルロス・ニエシ、サントス・マジ、ニコラス・パラシーノ、ポーチョ・パルメル、カルロス・コラーレス、“チョロ”・マモーネ

［バイオリン］　セサル・ジャーノス、他１名

［コントラバス］　ドミンゴ・ディアニ、エドゥアルド・ルック、他2名

［歌手］　ロサウラ・シルベストレ

［ダンサー］　シルビア／ロベルト、シンティア／オマール、シルビア／ジュニオール、アウロラ／フィルポ　（思いつくままに…）

○　お忙しいところをありがとうございました。次回はいよいよ六本木にあった注目の「カンデラリア」にスポットを当てたいと思います。　（2013.2.27収録）

想い出のタンゴ喫茶巡り（第7回）

高田馬場「ボーカ」、新宿「モデルン」

荒川　孝一（東京・北区）

平成19年６月に当アカデミーの会員でありタンゴクラブ“ノチェロ・ソイ”を主宰する宮本政樹さんより、「ヌエベ・デ・フリオ前夜祭」開催の案内状が届きました。そして当日のコメンテーターの中に元タンゴ喫茶「ボーカ」の経営者であった高志敏枝ママの名前を見出した時は大変興奮してしまった。40年以上もお会いしていなかったが、健在のご様子が大変嬉しく、早速参加の返信を出しました。

ではここで私のタンゴ喫茶との関わりを薄れゆく記憶を頼りに述べてみます。

私が最初に足を踏み入れたタンゴ喫茶は小林謙一先輩がTangolandia2010年春号に書かれた新宿伊勢丹向かいの帝都座（現丸井本店）の裏通りにあった「コロンビア」でした。間もなく素晴らしい演奏が流れて来たので店の女性に曲名を訊くとアドルフォ・カラベリ楽団の「フェリシア」とのことでした。それまではフアン・ダリエンソの1939年録音盤しか聴いていなかったため演奏スタイル、アレンジで全然違った曲に聞こえてしまったが、今考えるとお粗末の極みであった。次回行った時に非常に派手な「カナロ・エン・パリ」が流れたので楽団名を訊くと常連さん持参の輸入盤でパンパ・レコードのエクトル・バレラとのこと、この二日間で客は常連のタンゴ通ばかりの様な気がしたため他の店を探そうと言うことになり、次に行った店は西武線の新宿駅に近い「まりも」でした。しかしここも後年「まりも族」と呼ばれた常連さん達が顔を利かせていたので気後れし、他の店を探すことにした。そして次に行った店がコタニレコード店の反対側右角の喫茶店コスタリカに沿った要通りの「モデルン」です。

「モデルン」は当時＜タンゴとシャンソン＞の店でイヴ・モンタン、ジュリエット・グレコ等のレコードも聴きましたが、間もなくタンゴ専門店となりました。一階は常連客が多かった様で、最初の頃我々は二階席でクリスマル・レコードのT.K.盤アニバル・トロイロ、ミュージック・ホールのカルロス・ディ・サルリのレコードを中心にリクエストをしては、大人しく聴いていました。

“中南米音楽”誌　昭和37年２月号から

やがて顔を覚えてもらい、しばらくして待望のフアン・ダリエンソ輸入盤（45回転シングル）の「ナシー・エン・ポンページャ」

が入ると気に入って繰り返しリクエストをしたので、そのうち私が店へ顔を出すたびにすぐこの曲をかけてくれた。もうこの頃は一階で聴くようになり上述の早稲田の先輩で現横浜プーロタンゴ同好会の小林謙一会長とも親交を深めていましたが、私にとってこの店で得た一番の収穫は氏との出会いであります。店のマネージャー田村氏秘蔵のロシータ･キロガの「センティミエント･マレーボ」「ヴィエハ・ギターラ」等も聴かせてもらいました。

「モデルン」で最初の頃に聴いたプグリエーセのアメリカ･デッカ盤の「アルゼンチン･ナイト」には衝撃的な感動を覚え、その後東芝エンジェル・レコードから出たプグリエーセの25ｃｍＬＰは全部揃えました。また甘党だった私には毎年鏡開きにお汁粉が振る舞われたことが忘れられない甘い想い出です。

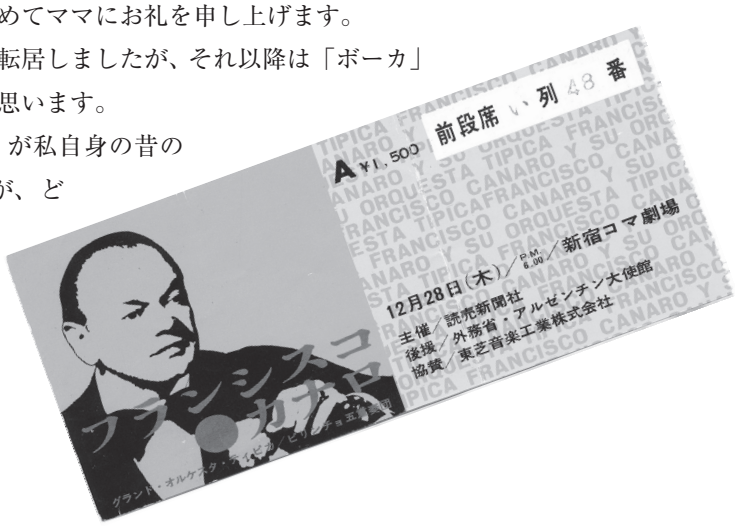
昭和33年に大学を卒業し社会人となった年に、生まれ育って24年間暮らした杉並区下高井戸を離れ新宿区戸塚町(現高田馬場４丁目)に引っ越しました。その時から学生時代にもたまには行っていた「ボーカ」が主流になりました。この店は高田馬場駅を出て早稲田通りを右に曲がり、漢方薬店と戸塚第二小学校の間の道を少し行った右側にありました。

「ボーカ」には当時早稲田鶴巻町に在住の小野正孝さんが編集した戦前レコードの楽団別、歌手別テープがあり、私はロシータ・キロガの「ラ・ムーサ・ミストンガ」「クアンド・ジェゲ・エル・オトーニョ」「フマンド・エスペロ」等が入ったテープを繰り返し聴きました。レコードの皿廻しは早稲田在校生の高橋君が手伝っていました。タンゴ床屋で有名だった寺田大作さんのレコ・コンも月に一回位開かれましたが、彼独特の口調でロベルト・フィルポをフイルポと言われていたのが懐かしく思い出されます。ポルテニア音楽同好会の大岩祥浩さんのレコ・コンも開かれ、当時のプログラムを所持しており月日（７月26日）は判りますが開催年が不明なのが残念です。ママは和服姿が多かった様な印象を持っていますが、記憶違いかも知れません。

昭和36年12月､待望のFco. カナロ楽団が来日した時､初日の良い席（６列目）のチケットを取って頂き、28日の歓送公演も最前列を取って頂きました。センター・マイクでエルネスト・エレーラが歌う時に唾が飛んでくる様な錯覚を感じ、若きグローリアとエドゥアルドの踊りが目の前でバッチリと見えてまさに特等席で、昭和29年11月21日の弟のフアン・カナロがアルゼンチンのオルケスタとして初来日した時、日本劇場の最上階の席から遙か下の方を見下ろして観賞したことと比べるとまさに雲泥の差であり、改めてママにお礼を申し上げます。

カナロ公演の翌年に千葉県松戸市に転居しましたが、それ以降は「ボーカ」に行くのは月に３回か４回位だったと思います。

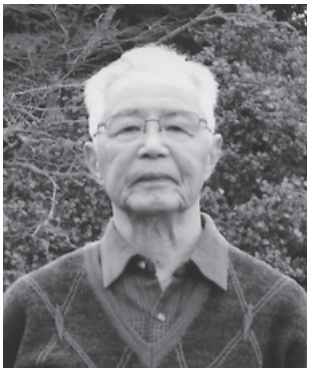
標題の「想い出のタンゴ喫茶巡り」が私自身の昔の思い出話の様になってしまいましたが、どうぞお許し下さい。



私の愛聴盤

～第３回～

早川　健太郎（三重県・志摩市）



はじめに

コレクターが沢山おられる当会のこと、私如き一介のタンゴ・ファンに、なぜこのようなご依頼があったのか、疑問を感じたのは事実です。島﨑会長殿より、大澤編集長殿経由にてお話を受けたときは驚きと光栄が交差し、受けるべきか否か正直迷い、結論としてこの機会が与えられたことに感謝しつつ、執筆を受理させて頂いた次第です。

昔入手した僅かなＳＰ盤も昭和34年の伊勢湾台風で一部が水没（当時四日市に在住）音響装置共々再スタートの状況でした。従い古い時代の音源は、復刻盤で楽しむ現状です。タンゴに接して半世紀以上経ちますが、この間諸般の事情から完全にブランクだった時期もあり、また年代により好みに変化の生じたことも事実です。取り敢えず現時点でプレーヤーによくかかる曲目、演奏者を挙げてみました。尚ＬＰ、ＣＤ（特にオムニバス）ではその盤全体を一個の愛聴盤として採用しています。

黄金時代に活躍した女性歌手から

「ラ・ランダ」メルセデス・シモーネ／トリオ・ティピコ　　**コロムビアＳ-30**

レーベルにカンシオンと明記されているだけあって、歌唱法が恰も語りかけるかのよう。「挙式を目前に愛する男から裏切られた乙女が、母親にランダ（花嫁衣装に着ける飾り）はもう要らない」と泣きながら訴える気持ちが切々と伝わってくる名唱。伴奏のトリオ・ティピコ（Ｖ：エンリケ・カントーレ、Bn：ホセ・ガルシーア、Pf：アルヘンティーノ・ヴァシェ）も控え目で歌手を引き立てる好演。

「セ・バ・ラ・ビーダ」インペリオ・アルヘンティーナ／ギター伴奏　　**コロムビア S-31**

本名はマグダレーナ・ニーレス・デ・ルリオ。ブエノス・アイレスで生まれ、幼少でスペインに渡り容姿端麗を買われ、若くして女優として芸能界で活躍する。一方歌手としても徐々に頭角を現わし、1930～35年に録音を行っているが、スペイン歌謡が主でアルゼンチン・タンゴは少なく、スペイン・オデオン社に録音を遺している。

「アルマ・デル・バンドネオン」タニア／オルケスタ・ディセポロ　　**コロムビアS-34**

本名はアナ・ルシアーノ・デビス。スペイン生まれ。幼少から芸能界に入り16歳でツアーの男性と結婚、芸名をタニアと名乗る。ブエノス・アイレスに移りタンゴの歌い方を勉強、後にE. S. ディセポロを知り意気投合、以来ディセポロの死まで愛人関係が続く（この件はご承知の通り）。ディセポロを歌わせたらタニアと言えば過言だろうか、抑揚と張りのある歌い方は流石であり、曲良し歌良しとはこの組み合わせがあって言えよう。落ち着いて聴ける一曲。

「ジーラ・ジーラ」ソフィア・ボサン／ピアノ、ヴァイオリン、ギター伴奏　**コロムビア S-73**
「センティミエント・ガウチョ」アダ・ファルコン／カナロ　　**コロムビア S-74**
「ラ・ウルティマ・コパ」コンスエロ・デ・グスマン／オーケストラ伴奏　**コロムビア S-10**

コンスエロ・デ・グスマンのレコードはたまたま２枚所持していますが、共に声量豊かで訛りのないスペイン語が気に入って聴いています。１枚がこの曲､他の１枚が「エル･パニュエリート（S-35)」でこの方は歌詞を最初から最後まで歌っています。これに対し「ラ･ウルティマ･コパ」はエストリビジョとしての数小節のみを歌っているが、優しい素直な声で好感が持てる。

このレコードについて、故芝野史郎さんに2004年頃お尋ねしたところ、次のようなご教示も戴きましたので、原文を掲載させて頂きます。

アダ・ファルコン

（以下引用）*「コンスエロ・デ・グスマン」について、的場氏もレコードを聴いての批評しか書いていませんが、伝聞ではブラジルの歌手とのことです。歌（レコード）は私の聴いた範囲では全部スペイン語でした。ラ・ウルティマ・コパはDW97183となっており、Dはダビングの*D*、W-97183はニューヨーク・コロムビア社マトリス番号です。・・・中略・・・レベルマークのブルンスウイックは関係ありませんが、発売の都合上ブルンスウイックの名を借りたものでしょう* **（引用了）**。ご参考まで。

「オラシオン」テレサ・アスプレーラ　　**コロンビア　３E-5371**
「アディオス・アルヘンティーナ」アリーナ・デ・シルバ　　**CTA-1006**

黄金時代を風靡した演奏たち

「レクエルド」クリストバル・エレーロ／ロドルフォ・ディアス（唄）　　**クリスマール P-1**

クリストバル・エレーロについてはタンゲアンド・エン・ハポン16号101頁の故石川浩司さん

の記事をご参照頂きたく。1950年初期に本邦に登場、新鮮なリズムと懐かしい想い出が蘇る。自身のバンドネオン中心に７名編成だが、全曲を通してリズミックでバイラブレ、特にヴァイオリンの低音のオブリガート、バンドネオンの左右からの音色とスタカットは実に歯切れがいい。R.ディアスの若くて声量十分な歌も心地よい。裏面の「オルガニート・デ・ラ・タルデ」ではピアノの活躍が楽しめる貴重な一枚である。

「ア・メディア・ルス」ロベルト・フィルポ　　コロムビアS-20

タンゴを聴き始めた学生時代に藤沢嵐子が歌うＳＰ盤（A-5025）を手にした時から、覚え易い歌詞とメロディが気に入り、本場の演奏を探して落ち着いたのがこの「R. フィルポ」と「R.キロガ(HQ CD-52)」であった。フィルポ楽団では前奏から男性歌手に続きバンドネオンの合奏とヴァイオリンのメロディが絡み合い、じっくりと聴かせてくれる。

過去の月刊誌の対談記事だったかに故高山正彦先生が、「R.フィルポのア・メディア・ルスのレコードは最高だね（名演とはお仰っておられなかった)」と語っておられるのが印象に残る。

「ラ・クンパルシータ」オルケスタ・クリオージャ・アルヘンティーナ
コロムビア J-1697

レコード盤、説明書には解説は皆無。後になって、エバ・ボール楽団であることが分かった次第。三部構成による基本的な形態を各楽器奏者が手順良く演奏していく姿は古代の演奏とは申せ、正しくタンゴ演奏の教科書を繙く感じすらしますが、いつ聴いても飽きの来ない演奏が名演の所以か、哀愁も十分に感じられて捨て難い一枚。

「ペロ・ジョ・セ」フアン・ギド　　AMP CD-1088
「ヌンカ」フランシクコ・ロムート
ラティーナLP　DL-112

懐かしのバンドネオン変奏集

「セギメ・シ・ポデス」フランシスコ・カナロ　　AMP CD-1094

カナロ1928年当時の演奏パターンでも、各楽器の活躍が一番鮮やかで、流れに乗っている感のある好演。この曲はO.プグリエーセが決定盤とされていますが、カナロのこの演奏も聴くに良し踊るに良し、明快で判り易い演奏は当時のカナロが偲ばれる。エンディングでのバンドネオンのソロ（変奏）はアンヘル・ラモスか、それともミノット・デ・チーコか、最高！

「アデリータ」フアン・マグリオ（パチョ）　　ラティーナ　SDL-2017

フアン･マグリオの演奏を纏めて聴けたのは､ラティーナ発売のＣＤ２（SDL-2006, 2007）であった。このＣＤ復刻版を聴いて、噂に違わぬ名演（パチョ独特の演奏パターン）に納得したのも事実。特に中盤からエンディングにかけての歌手とヴァイオリン群の絡み、ガブリエル・クラウシ

と思われるバンドネオンのソロ（変奏）は最高。自作自演のこの曲などはその最たるものかと思われる。

「アデリーナ」エドガルド・ドナート／ルイス・ディアス（唄）　**AMP CD-1099**
「ドゥエロ・クリオージョ」フアン・カンバレリ／アルベルト・カサレス（唄）
オデオンOR-9087
「カナロ」ロドルフォ・ビアジ　**ミュージック・ホール CD 236515**

終わりに

今、改めて愛聴盤としてリスト・アップした内容がこのようになろうとは、自分自身が如何に回顧（懐古）趣味だったか、思い知らされた気がしています。時代と共にタンゴの内容も変わって来ました。其々の時代に名曲名演が沢山あります。しかし、若い頃に小遣いをはたいて入手したディスクは本当に何度も聴いた記憶があります。聴いていて歌詞、メロディ、伴奏などの内容・動きが次々と頭に浮かんできたものです。興に乗って聴いた頃を思うと、それぞれの曲が身に沁みついていたのだと勝手な解釈をして、納得かつ確認出来たのは事実で、嬉しい限りです。

よき機会を与えて下さったことに感謝申し上げます。

スペイン語の正書法について

この機関誌の名物連載である高場将美さんの「わたしのひそかに愛するタンゴ」。今号の５頁末尾近くを読んで驚かれる方々がある筈です（私もその一人でした）。“本題とは関係ない話ですが、今日のスペイン語では指示代名詞aquel などにアクセント記号を付けてはいけない”という部分です。

Real Academia Española（スペインの国立国語研究所）- Asociación de Academias de la Lengua Española "Ortografía BÁSICA de la lengua española"（“スペイン語正書法の基礎”）（2012, Editorial Planeta Mexicana）です。ＲＡＥと各国のスペイン語アカデミーの共同作業で、少し前に、ものすごく厚い、高価な正字法の本を出したようですが、BÁSICA で、じゅうぶん詳細です。

上記が高場さんにご教示頂いた出典です。この BÁSICA（大版ではないマニュアル版）が Amazon で現時点で1,000円以下で入手可能です。

（大澤）

旅と音楽と、、、中南米旅行の想い出

石濱　洋（東京・東村山市）

私は1960年前後ポルテニア音楽同好会および中南米音楽研究会に入っていましたが、その後空白の時代が続いていました。しかし、人生は面白いもので、偶然の連続で青山マンダラでのコンサートでタンゴ・アカデミーの皆様と隣り合わせになり、有難いことにご親切なお誘いを頂き、一昨年末から皆様のお仲間に入れて頂いてタンゴを楽しんでいます、タンゴ再入門です。これからもよろしくお願いいたします。

今回「シルクロードからケルトの世界、そしてラテンの国々へ」と言う副題で書き始めましたが長くなり過ぎそうで、中南米の国々に限ることにしました。私どもの旅は音楽中心のツアーではなく一般の観光ツアーでしたので音楽に出会う機会はそれほど多くは有りませんでした。でもメキシコ、キューバには音楽が溢れている感じで、沢山のＣＤを入手できました。旅行にはポータブルＣＤプレーヤーを必ず持参して、購入したＣＤをバスでの長距離移動時などにはＣＤを聴きながら、地酒を飲みながら、移り行く車窓風景を楽しむ、これぞ旅の醍醐味、至福の時間です。他の地域への旅行を挿みながら訪れた中南米の国々について、音楽を聴き・思い出しながら纏めてみました。

メキシコへはヒューストンで乗り継ぎメキシコシティに到着、翌日から市内（ソカロ/憲法広場、国立人類学博物館、グアダルーペ寺院）･近郊（テオティワカン遺跡、クエルナバカ、「銀の町」タスコ、ソチミルコ遺跡等）を観光し、夜はメキシカン・フォルクローレのディナーショーを楽しみました。さらにポサリカからメキシコ湾に面した美しい町ベラクルスへ。丁度カーニバルが終わった後でした。またダンソンの盛んな地ときいていましたので早速そのＣＤを購入しました。ベラクルスからはオアハカへ。オアハカは雰囲気のある魅力的町でもう一度訪れたいと思います。

その後バスに揺られチャバス州の州都トゥストラ・グティエーレスに到着。翌日パレンケに到着。途中メキシコ湾沿いのシーフードレストランで食べたセビッチェの味は忘れられません。次の日はマヤ古典期の至宝「パレンケ遺跡」を観光。ビヤエルモーサへ。途中オルメカ文化を象徴する巨大人頭像で有名なラベンタ遺跡公園を見学。ビヤエルモーサから再びメキシコ湾岸に出て、エズナー遺跡を経てカンペチェ（美しいコロニアル都市）に到着。次の日ユカタン州の州都メリダに到着、市内観光

＊　都市名の一重下線は一泊を、二重下線は2～3連泊を意味します

中野口英世記念像に出会いました。メリダはトリオ・ロス・パンチョスの誕生の地でもあります。メキシコでは音楽に出会う機会も多く、購入したＣＤは20数枚になりました。

そして更にインカ文明／アンデス文明の地も見聞したくなり、リオのカーニバルに合わせてこれらの地域を旅するツアーに参加しました。訪問国はペルー・ボリビア・アルゼンチン・ブラジル・チリ（サンチャゴでの乗継ぎのみ）でした。先ず成田からロサンゼルス経由の合計20時間近いフライトでペルーの首都リマに到着、アンデス音楽で迎えられました。早速その楽団のＣＤ１枚を購入。次の日からのペルー観光第１日目は市内のカテドラル・アルマス広場・黄金博物館・恋人達の公園等を訪れました。２日目は航空機にて地上絵観光の拠点イカへ（１時間余のフライト）、着後セスナ機に乗り換えナスカの地上絵を上空から観光、その後イカ市内を観光し（考古学博物館、オアシス等）、夕刻空路リマに戻りました。空港の売店でアンデス音楽ＣＤ２枚組とAlicia Maguina y Óscar AvilésのＣＤを購入。前者にはAlma, Corazón y Vidaの演奏が入っていました。

３日目いよいよインカ帝国の首都だったクスコ（標高約3400m）へ、リマから１時間余のフライトで到着、フォルクローレの演奏で迎えられました。市内散策・観光後アルマス広場に面したレストランでフォルクローレの演奏を聴きながらの昼食でした。その後インカの遺跡（太陽の神殿／サント・ドミンゴ教会、サクサゥワマン／堅牢な要塞跡など）を観光後ホテルへ。高山病予防のため入浴とアルコールは控えた方がよいとのことでした。

４日目、小雨模様の早朝クスコ駅からウルバンバ川に沿って何度かのスィッチバックを繰り返しながら峠（標高3,650m）を越え３時間45分で終着駅アグアス・カリエンテス駅に、さらにバスでつづら折りの山道を約30分、やっと「謎の空中都市マチュピチュ」に到着。約３時間の観光後クスコに戻り、夜はフォルクローレ・ショーを楽しみながらの食事でした。

５日目の朝クスコから専用バスで伝説の湖・チチカカ湖畔の町プーノ（標高3855m）へ、標高4335mのララヤ峠を越えて湖畔のホテルに着いたのは午後4時近くでした。早速モーターボートに乗り、トトラと呼ばれる葦を積み重ねた浮島ウロス島を訪れ、トトラ中心の人々の生活を見学しホテルに戻りました。ペルー観光はこれで終わりです。フォルクローレが一杯の旅でした。翌日、市（いち）で賑わう国境の町デサグアデーロへ。歩いて国境を越えるので大荷物を持ち、足早に歩いているうちに苦しくなりやっとの思いでボリビア側で待機しているバスにたどり着きました。高山病に罹ってしまったのです、後部座席に横たわり酸素吸入しながら首都ラパス（標高3650m）に向いました。途中の観光には残念ながら参加できませんでした。しかし、夕暮れ時、すり鉢状に広がるラパスの街灯りは忘れ得ぬ光景となりました。

そしていよいよブエノスアイレスへ。ホテルに到着したのは夕暮れ近くでした。高山病の影響が残るといけないと言うことで当地在住の日本人医師の診察・治療を受けました。アルゼンチン２日目ブエノスアイレスの市内観光です、７月９日通り・５月広場・コロン劇場・ボカ地区・ラプラタ川等など写真で見た光景を目の前に、特にカミニート通りに立った時は遂にここに来たと言う思いで感無量でした。記念にガルデルのＣＤ（２枚組）を購入しました。その夜はEsquina Carlos Garde1でのタンゴ・ショー、ドクターストップでワインは飲めませんでしたが、アルゼンチンタン

ゴの演奏に・歌に・踊りに酔い痴れた夜でした。アルゼンチン３日目は昼近く空路（２時間弱）プエルトイグアスへ。アルゼンチン側からイグアスの滝を見学。その圧倒的な水量と規模の大迫力でした。その後ブラジルに入国し、イグアスの滝近くのホテルに到着。夕食時１週間余の禁酒から開放されビールを飲むことができました。翌日（ブラジル観光１日目）ホテル目の前からイグアスの滝を徒歩観光、ブラジル側からの眺めも大迫力でした。午後空路ブラジリアで乗り継ぎアマゾンの街マナウスへ､ホテルには夜遅く到着。ホテルでの夕食後はアマゾンの民族ショー（牛踊り）を見ました。跳んだり跳ねたり、リズミカルに時折官能的でコミカルにどことなく祀りを感じさせる迫力のあるショーでした。ブラジル観光３日目午前中はマナウスの市内観光では、セバスティアン広場にあるアマゾナス劇場（パリのオペラ座を模して造られた）を見学、劇場売店でＣＤ２枚を購入。午後南米最後の訪問地リオデジャネイロへ。ホテル到着は午後10時を過ぎていました。４日目は市内観光でボン・デ・アスーカル（砂糖パンの丘）へ。ロープウェーを乗り継いで山頂からの、青い海・青い空そしてリオの街の眺めは素晴らしいものでした。昼食後は暫しイパネマ海岸を散策。ホテルでの夕食後は、いよいよこの旅行のメイン・イベントのひとつリオのカーニバル・ウィナーズパレードです。華麗な踊り・豪華絢爛な山車・大規模なパレードに会場は熱気と興奮に包まれ、時の経つのも忘れサンバのステップを踏みながらの見学でした。ホテルに戻ったのは明け方近くでした。５日目もリオ観光の続きで、大きなキリスト像のあるコルコバードの丘に登りました。ここからの眺めもまた素晴らしいものでした。リオの記念にボサノバのＣＤとカーニバルのＣＤを購入。次の日空港でもブラジルサウンドのＣＤを追加し、午後の便で乗り継ぎのサンティアゴ（チリ）空港へ、ここでVioleta Parraの２枚組ＣＤとLa Nueva Canción Chilenaを購入。、夜遅くの便でリマを経由しロサンゼルスへ、－５時間の時差が有りロス到着は朝でした。早速、サンタモニカ、ビバリーヒルズ、チャイニーズ・シアター等を観光後エアポート・シェラトンで一泊し、帰国。

その後別の機会にキューバ横断バスの旅12日間/ハバナからサンティアゴへのツアーに参加しました。トロント（カナダ）で一泊後空路ハバナへ。ハバナからは専用バスでキューバ革命の足跡を遡るようにサンタクララ～シエンフエゴス～トリニダー～サンティ・スピリトゥス～カマグウェイ～バヤモ～サンティアゴ・デ・クーバの街々を観光後、空路ハバナに戻りました。ハバナでは市内観光およびヘミングウェイゆかりのスポットを訪れ、さらにビニャーレスの谷まで足を伸ばしました。キューバ最後の夜はフロリディータにて夕食、その後クラシックタクシーで「トロピカーナ」へ、ハバナ・クラブ（ラム酒）を飲みながら華麗なショーを楽しみ、そのＤＶＤとキューバ音楽のＣＤ数枚購入。結局この旅で購入したＣＤは約20枚になりました。生活と共に音楽が、音楽と共にダンスのあるキューバは魅力的でした。帰路はハバナからトロントへ、そして成田へ。また、この旅で素晴らしい出会いがありましたがそれについては別途お話する機会があればと思います。

以上、延べ２ヶ月余４回に分けた中南米への旅ですが、中南米音楽についての知識が乏しい上、文才もなく旅行日程の羅列に止まってしまいましたが、興味ある個所があれば幸いです。今度は一般観光ではなく音楽を中心とした中南米旅行をしたいと思っています。

Tango bar めぐり 第20回

四谷荒木町「私の隠れ家　Mi Refugio」

町田　静子（東京・杉並区）

「私の隠れ家　Mi Refugio」は、四谷三丁目の交差点近くから四谷荒木町入り口を曲がり、少し歩いたビルの２階に大通りの喧騒が止まったかのように佇んでいる。ワイン色の看板に気づかないと見逃してしまいそう。その名の通り隠れ家風だ。

２階の入り口前にはドライフラワーと柔らかい灯り、そして「ごゆっくりどうぞ」の文字が来る人をふんわりと迎えてくれる。

店主は瓜生純子さん。

20歳の時に神保町・古本屋街の路地裏にあるタンゴ喫茶「ミロンガ・ヌオーバ」に出会い、後にそこで６年働いた。半世紀を超えて今もタンゴファンのノスタルジーをかきたて続ける老舗のタンゴ喫茶「ミロンガ」で働いて、タンゴという音楽が持つコラソンをたくさんのお客様から学んだ。いつの日か一杯の珈琲とこだわりの音楽で心地よい時間が流れる場を提供したいと思うようになり、中古レコード店を廻り、古いレコードを集めるようになったそう。

2010年10月に独立。四谷荒木町に「レコード時代の古い音楽を聴きながら、おいしい珈琲やお酒を楽しめるお店」をコンセプトに「私の隠れ家　Mi Refugio」は誕生した。お店の名前はフアン・カルロス・コビアン作曲、ペドロ・ヌーマ・コルドバ詞の名曲「Mi Refugio」からいただいた。瓜生さんのお客様ひとりひとりの大切な場所になれればとの願いが込められている。

お店の中に入るとそこはレトロな空間が広がる。昭和初期の映画シーンのような雰囲気だ。格子窓からの風がやさしい。入り口付近の資料コーナーには開店以来置かれているお客様用の書き込みノートがある。このコーナーもアンティークな灯りに包まれていて、私のお気に入りの場所だ。書き込みノートは４冊になった。淡い灯りの下で読んでいると書き手の鼓動が伝わってくる。

レコードコーナーには珍しい手回し蓄音機。瓜生さん自ら、お客様のリクエストに応えてハンドルを回す。それもかなり回さないと音が出ない。

訪れたこの日はフランシスコ・ロムート楽団の「Tormenta」をリクエストした。しばし針音の先に機微に満ちたふくよかな音の世界を体感する。1930年代が甦るようだ。

「古いレコード集めに苦労はないのですか？」と聞いてみたところ、「お客様が２枚あるからと持って来て下さったり、常連の古いカメラを扱っているオーナーの方が、骨董カメラの購入に伺うとその家には埋もれたＳＰが何十枚もあって、それも一緒に持っていって欲しいと頼まれることが結構あったりして、今ではそんな方々から頂くＳＰやＬＰがこのお店の財産になっています」とのこと。たくさんのお客様に可愛がっていただける瓜生さんのお人柄のたまものといえる。アルゼンチンタンゴだけではなく、いろいろなジャンルの名曲も聴かせてくれる。

メニューは多彩。特に珈琲は「隠れ家ブレンド」と題して注文を受けてからサイフォンで丁寧に入れてくれる。深煎りながらエスプリがきいていて、美味さが際立つ。深煎豆をブランデーに漬けた自家製の珈琲酒もある。珍しいところで、ジンジャエールを注文すると本物の生姜を摺ってブレンドし、お客様にお出ししている。生姜の香りが広がり、なんとも言えずまろやかな抜群なお味だ。ケーキも収穫したての柿やサツマイモをチーズケーキに変身させたりと旬の食材に心がけている。

一杯の珈琲でお気に入りのシートに座り、ゆったりとタンゴを聴くのもいいが、ぜひ「本日の隠れ家ごはん」を食べて欲しい。瓜生さんがこだわりを持ってメニューを決め、日替わりで手作りしている野菜中心の体にやさしいヘルシーなお料理が10品目並び、千円で提供している。

私が伺う時はいつもお気に入りのタンゴをかけていただき、この「本日の隠れ家ごはん」のお料理を肴にビールを飲んでいる。まさに極上のひととき.... お腹も心も幸せで満たされる。

瓜生さんに何故この四谷荒木町にお店を構えたのか聞いてみた。

「ここ四谷荒木町は江戸時代、美濃高須藩主の松平摂津之守がお屋敷としていた場所で、すごく歴史がある町なんです。その後は東京でも有数の高級な花柳界となります。検番もあってね。名だたる政治家さんも足繁く通われたと聞いています。そんな由緒ある町が醸し出す雰囲気に憧れていてね。今では大人が憩うスポットとして知られていて、お店を開くならこの場所でと決めていたからですね。」

なるほど.... そういえば「Mi Refugio」のあるビルの廻りの路地にはびっしりと飲食店が連なっている。それもどことなく粋を感じさせる店構えだ。近くには「津之守弁財天」が江戸の香りを残して祭られていて、そのそばに池があったり、自然のままの石畳の路地や隠れた坂が突然現れたりと、かつての華やかな頃の歴史を垣間見ることができる。

「不動産会社の方にこのお店を案内してもらいましたが、居抜きで雰囲気が自分の思っていたのとぴったり合っていたので一目で気に入り、即決しました。」と当時を語ってくれた。笑顔が

とびきり素敵だ。

近所の飲食街の方が休憩時間を利用してレトロな雰囲気に惹かれ、一息つくために珈琲を飲みにいらしたり、遅めの食事をとりに来る方等名曲を聴くためというより、カウンターで瓜生さんとのトークを楽しむために来店するお客様も多い。この界隈で著名な流しの方もふらりと「本日の隠れ家ごはん」を食べに来るそうだ。

３度目の冬を迎えてすっかり、四谷荒木町に溶け込んだ。

１年に１回、定休日の日曜日に「隠れ家　にちようコンサート」を開いて有志による生演奏と蓄音機によるＳＰレコードコンサートも開催している。

「本当はもっともっと古いタンゴの名曲を聴きに来ていただける方が増えると嬉しいのですがね」とちょっぴり残念そう。

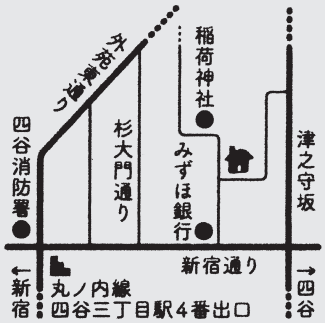
日頃の喧騒を忘れ、心に響くタンゴの名曲を聴きながら、じっくりとそしてゆったりとした時間を「私の隠れ家　Mi Refugio」で過ごしてみませんか？

高品質珈琲と名曲

私の隠れ家

東京都新宿区荒木町6　ルミエール四谷２階

丸ノ内線四谷三丁目駅４番出口上がり、
四谷三丁目交差点四谷方面、みずほ銀行角を左に曲がる、
四谷荒木町車力門通り入り口より徒歩113歩、上見上げる



第３回　ＮＴＡ主催ミロンガのお知らせ

日時：10 月 12 日（土）

場所：いきいきプラザー番町
「カスケードホール」
（昨年と同じ場所です）

と決定しました。
多くの皆さまの参加を期待します。

タンゴ、それはドラマ

ユリ・アスセナ（東京・大田区）

ライブにて　ユリ・アスセナ

所詮この世は男と女。歌の詩も同じこと。《男と女の間には深くて暗い川がある、誰も渡れぬ川なれどエンヤコラ今夜も船を出す》これはタンゴの歌ではありませんが、結局は分かり合えないとわかっていてもまたトライする、だから歌になる。男は過去と美化した幻影をズルズルと引っ張って生きていくし、女は目の前の現実を見ている、苦しみ苦しみぬいたらピリオドを打ち、もう後ろは振り返らない概してそういうケースが多いようです。スペイン語の歌詞を解釈する時主人公は男性か？女性か？を形容詞等から想像しますが、タンゴに時々ある歌詞で、「別れる前にもう一度でいいからキスして」とあるのは男からの言葉でしかないと思われます。女は「もう二度と触らないで」と言うでしょうから…日本の演歌の歌詞はタンゴと反対に恋に苦しむ女を歌っている内容が多いです。着ては貰えないセーターを編んでいたり、春は二重に締めていた帯が秋には三重でもまだ余るとか、痩せて指輪が回ってしまうとか…悲劇のヒロインを歌っていますが、これは作詞家の多くは男性であり、その男性の方々の女性に対する願望なのでこのような歌詞になるのではないかと…本当は女性の方が男性より芯のところは強い（生命力等）と男性も分かってはいるが、女性にはか弱い存在であって欲しいとの思いがいっぱいなのだと思います。男性にしか〝女々しい〟と言う言葉は使わないし、その女々しい状況に居続けているタンゴの歌詞がなんと多いことか！またそのような状況だからこそタンゴの歌も生まれるのでしょうが…女性は過去を上書きして生きて行くと言われます、過去はそこで一度完了するわけです。でも考えようによってはそんな苦しさの中に居続けることに、耐えられないからではないかとも思うのですが。他に目を向けないと息も出来ないから次の杖を手に取るのでは？恋に落ちれば嬉しい時、不安で苦しい時、喜んだり、泣いたり、嫉妬したり…喜怒哀楽の連続、毎日がドラマですね。これは昔も今も変わらないと思ってきましたが、最近は恋愛に興味がないと言う若者が増えてきているらしいです！『絶食男子、女子』と言うとのこと…恋をしないのですから失恋などのドロドロした状況にはなり得ません。歌詞の未来はいったいどうなるのでしょうか？

歌詞にみる男と女のことを話してきましたがダンスの世界はどうなのでしょうか？

今私もサロンダンスを少々たしなみ、いつもミロンガで楽しんでおりますが、アルゼンチンタ

ンゴダンスを初めて間近で見たのはかなり昔、京王プラザホテルのタンゲリア「コンソート」、そして「タンゴアルヘンティーノ」のステージでした。そして赤坂の「ノスタルヒアス」のダンスカップルのシルビア&ロベルトにダンスを習ったことがありました。今思えばこの時のダンスはステージダンスだったのですね。運動神経が鈍い私はすぐに腰を痛め、友人と母まで誘って行ったのに早々に戦線離脱…そして長〜いご無沙汰の後、数年前にアルゼンチンタンゴダンスに再会したのです。ミロンガを覗く機会があり会場の椅子に座り眺め…そこには私の知らないアルゼンチンタンゴダンス、頬と頬を寄せ深いホールド（アブラッソ）で踊るカップルの姿にはビックリ！今思えばそれがサロンダンスの洗礼でした。どのようなタンゴがダンスには楽しいのかしら？と思い、先ずは自分で体験しなければと一念発起し現在に至っている次第です。ミロンガパーティーは東京では殆んど毎日何処かで催されていて、私も踊ったり、時には歌ったりしております。正直言ってそれまではつい歌の曲ばかりを聴いてしまいがちでしたが、ミロンガでは多種多様な曲を自然と聴きますので楽しみもまた広がってきています。ダンスにおける男女のお話に戻りますとサロンダンスには大きく分けて、古典（トラディシオナル）と現代（ヌエボ）のタンゴダンスがあります。ヌエボのホールドはあまり近付かず離れがち、時には男女のポジションが入れ代わったり、服装も同じよう、女性の靴もハイヒールではない時もあり、男女の役割が決まっていない時も多々あります。最近は世界的にいろいろな面で中性化しているように思います。最近こんなことが時々あります…電車で１席しか空いていない時のこと…乗って来たカップル、譲り合うこともなく、何のためらいもなく、ごく自然にその１席に男子が座る！という光景です。最初は私もクチあんぐり！こんなことではレディファーストの海外に行ったらまぁ何と思われてしまうかと常々感じていた処、遂に外国人カップル、（男子だけが座る）に遭遇！もっとクチあんぐりすることになってしまいました。彼女がママ化して彼は子供化しているのでしょうか？昔だったら男の人は年取っても男は男と思って痩せ我慢でも頑張ったと思いますが…最近はタンゴも含め音楽も中性化というのかあまり強弱のはっきりした曲よりイージーリスニング的な曲、サラサラして耳障りが柔らかい曲が好まれる傾向があるように感じます。洗練され＝現代化されると中性化しアクがなくなってぼやけてきます。男女の違いがあるからこそ相手の短所も長所もよりはっきり見えてきてそしてお互いを引き立て合えるのではないでしょうか。音楽において、歌もダンスも１曲３分のなかに人生のドラマが詰まっています。強があるから弱が引き立つ、その逆に弱があるから強が引き立つ、喜怒哀楽も然り、その存在が他方をより引き立て全体が相乗効果でより素晴らしくなっていくと感じています。私の恩師にあたるピアニストのマエストロ大塚典さんは本場のタンゴらしいアタックの効いたそれは素敵なピアノを弾いて下さっていました。マエストロは前述の『強弱』や『引き立て合い』をいつも強調して話していらしたのを思い出します。私は粘りがある、そしてドラマチックなタンゴが好みなので（勿論ＴＰＯですが）今では少々時代遅れなのかもしれません

人生はドラマ、タンゴもドラマ、喜怒哀楽が欠かせません。それから私のタンゴにおいて欠かせないのはアラバレーロ（下町風）なタンゴで、Tita Merelloでお馴染みのEl choclo やSe dice de mí もレパートリーにしています。Se dice de mí は内容も面白いので日本語で歌えばお客様も楽しんで頂けると思い音符に日本語を乗せてみたところ、何とタンゴではなくシャンソンになってしまったので仕方なく一部日本語のセリフにして歌っています。スペイン語の抑揚とメロ

ディーが合って曲が作られているので他の言語だと曲の雰囲気が変わってしまうようです。やはりタンゴはスペイン語で歌う方が適していると感じています。言葉の障害はいつもついてまわる問題です。字幕があれば同時理解の助けになると思いますが、なかなかそのような贅沢もできませんので日々葛藤しています。そしてこれからもユリ・アスセナはドラマチックなそしてアラバレーロなタンゴを歌い続けていきたいと思っています。

さて振り返ってみれば、タンゴを全く知らない時私は京王プラザホテル（東京）でのヴィルヒニア・ルーケのライブで彼女の歌に魅了され、これがタンゴと言うものなら私は大好きとタンゴに恋をし、のめり込んだのがタンゴとの始まりでした。ルーケの歌はタンゴも言葉も分からない人でもグイグイ引っ張り込む説得力のある歌でした。そして10年程前、ルーケの伴奏をしていたバンドネオン奏者ウーゴ・パガーノとの再会、そして先程お話しましたピアニストのマエストロ大塚典との再会が縁でタンゴをちゃんと勉強しなさいと神様に言われているように思い、堰を切ったようにタンゴに取り組みました。この再会がなければ今私はタンゴを歌っていなかったかもしれません。私の恩師、そのマエストロ大塚が今年１月天国に突然旅立たれました。１年前に島﨑会長のお勧めで浦和のタンゴコンサートに出演させて頂いた折、ここ数年ステージでご一緒できていなかったマエストロに『Garganta con arena』（砂混じりの喉…ゴジェネッチェを偲ぶ歌）を伴奏して頂き、マエストロにもいたく気に入って頂きました。いつも歌を深く愛して下さったマエストロ（オスカル）にこの曲を伴奏して頂けて本当に良かったと…感無量の想いです。そしてこのご縁を導いて頂いた島﨑会長に心より感謝致します。

ライブでの風景　左から　大塚　典、ウーゴ・パガーノ、ユリ・アスセナ、田辺和弘、吉田　篤

ご自分の演奏最初の曲はいつも「Ensueños」（夢の中へ）でした。告別式、最後のお別れの時私は思わずマエストロに語りかけたのを思い出します…

『Maestro Óscar, Ensueñe…Muchísimas gracias con todo mi corazón.』

（マエストロ オスカル、どうぞ夢の中へ…本当に有難うございました）この紙面をお借りしてご冥福を心よりお祈りさせて頂きます。また、私の次回ライブでこの曲『Garganta con arena』をマエストロ大塚に捧げたいと思っております。

余談になりますが、いつも私は年に１～２回のペースでリサイタルライブをしております

初めてタンゴに触れるお客様でも楽しんで帰って頂けるような肩の凝らない、笑いもいっぱいな気さくなライブを心掛けております。

さて次回はどんなライブになりますか…ご期待下さいませ。（次回は7/18です）

そしてタンゴを愛する諸先輩、多くの友人に恵まれ過ごすことができる幸せな日々に心より感謝致しております。

ではまたお会いする日まで…チャオ！

ヘルシンキでミロンガとの遭遇

山本　幸洋

ライスが配給するORIENTE MUSIK原盤『世界のタンゴ』シリーズが面白い。ロシア、ルーマニア、ギリシャ、トルコ、エジプト、アルジェリア／イタリア、フランス、ルーマニア、ギリシャ／ポーランド／トルコと既に４集まで出ていて、その土地の言葉やメロディと結びついたローカル色豊かな、個性的な歌謡タンゴになっている。日本タンゴ・アカデミーでも欧州タンゴのファンが（実は）多く、姉妹機関誌『タンゲアンド・エン・ハポン』では故芝野史郎氏を中心とした記事が好評である。

昨2012年６月最終週の一週間、私はフィンランドの首都ヘルシンキに滞在した。この季節は北欧にとって最も心地よい気候だそうで、私の体感では東京の４月だろうか。薄手のスーツでちょうど良いくらいである。高緯度なため夜10時過ぎまで明るく、さすがスカンジナビア！と感激した（←ちょっと芝居入れてます）。フィンランドはフィン人の国という意味の国際名で、現地の言葉ではスオミという。ジャパンとニッポンの違いである。ちょっと見がややアジアに近いのがフィン人で、ときどき見かける金髪ブルーアイはスウェーデン系子孫ということだ。有名なニシンの酢漬けやサケ・マスをたくさん食べるのも、なんとなーく親近感を持った。宿泊先から、毎朝ヘルシンキの目抜き通りを通って、支度中のアーリッカやアラビア、マリメッコなどのウィンドウの前を通り、港でカモメの襲撃を受けつつ、たくさんの種類のベリーが市場で山積みになっているのを横目で見ながら、とある国際学会の会場へ通勤した。カンファレンス・ディナーがなければ、午後５時くらいには解放されるので、毎日違ったレストランで夕食を取ろうと、ヘルシンキの散策も兼ねて毎日一時間は歩いた。もちろん、散策の目的の何分の一かは、当地のレコー

6月28日（木）13 ～ 21時はタンゴ

ミロンガ！

ド屋に行くことだった。

ロシア統制時代に建てられた建造物を眺めながら、ヘルシンキ市のウェブで入手した地図とレコ屋情報を手に歩いていくと、なにやらタンゴが聞こえてくる。アルゼンチンのタンゴだ。音のする方へ歩いていくと、なんとミロンガをやっている。

場所はデザイン博物館、ハイセンスなオープン・スペースに40年代のタンゴが鳴っている。さすがにナマ演奏ではなかったが、とにかく場慣れしているというか、みなさん自然体で踊っている。とても興味がわいてきたので、時間を気にしながら（小売店は午後６時とか６時半で閉店してしまう）、少し眺めていた。ヘルシンキでタンゴかぁという感慨だ。英語が通じる街なので、とりあえず一番美しい女性に訊いてみた。要約すると、「Amigos del Tango」という愛好家集団があって、週末にワークショップをやったり、ときどきミロンガを開催しているのだと言う。愛好者は、その方の見立てでは500名くらいで、20歳代からベテランまで幅広い年齢構成とのこと。バイレには40 ～ 50年代のタンゴがいいみたいだ。熱狂的という訳ではなく、アキ・カリウスマキ監督の映画に見るように、そこにあるものという感じだろうか。嬉しかったのは、「アキヒト・ババを知ってますか？」と訊かれたときだ。馬場明人さんが主催するＣＴＡのＣＤが海を越えてフィンランドにも流通しており、貴重なＳＰ音盤を駆使し丁寧に整理されたＣＤとして喜ばれているのだ。思わず握手！

しかし、偶然である。この日はレコ屋に行って、映画のロケ地になった「かもめ食堂」に行こうとして、辻を少し間違って歩いていてミロンガに出逢ったのだ。実はタンゲアンドに掲載されたタンゴクリスタルの記事を作成しており、滞在中はタンゴ度が高まっていたから、引き寄せられたのかもしれない。トナカイ肉を牛肉に、黒ビールをワインに見立てれば、ブエノスな気がしないでもない。夜なのに陽が高いけど。

現地で手にしたフライヤ。ウェブ・サイト：www.tango.fi、Facebookもある

隣のレコ屋LEVYKAUPPAの店内

番外編：結局、翌日出直すことになったのだが、辻に３軒ほど固まってレコード屋はあった。DIGELIUSにはキューバ盤がけっこうあり、レコ屋の主人同士は友達で、イラケレの78年ヘルシンキ公演を最前列で観たというロコである。タンゴのＬＰは見つからなかったが､オマーラ・ポルトゥオンドとマルティン・ロハスの74年ヘルシンキ録音LOVE原盤など数枚を購入した。

在りし日の芝野史郎氏を偲んで

冨田　稔（香川県・丸亀市）

芝野史郎氏ご逝去の報を日本タンゴ・アカデミー副機関誌”Tangolandia”（2012秋号）で拝見しました。

氏は長年に亘り古い音源や資料の収集に努められ、私たちタンゴ愛好家のためにあまねく情報を提供されました。とりわけヨーロッパで普及したタンゴを広く紹介されたことは特筆すべきことです。ここに深甚なる敬意と感謝の念を捧げ、ご冥福をお祈りする次第です。

芝野氏と私とは居住地も遠く離れており、中々濃密なお付き合いをする機会には恵まれませんでしたが、約50年に亘り全国各地のタンゴに関するイベント参加や文通により、交流を重ねて参りました。氏の訃報に接し個人的な思い出や氏のご遺志をこの先どのように伝承し実現すべきか、述べてみたいと思います

私が芝野氏に始めてお会いしたのは、氏が岡山市に在勤の頃であったかと思われます。私の住む丸亀市からほど近い高松市のタンゴ同好会にお見えになられたこともあります。

30年以上も昔のことになりますが、草津のご自宅に一泊させて頂いたこともあります。家内と一緒に紅葉を見るために琵琶湖東岸の永源寺へ参詣した折りに、氏にご挨拶を、と思いたち、勤め先にお電話したところマイカーで宿泊所まで迎えに来られ、家内に「一寸ご主人をお借りします」の一言で辞退する隙も与えずご自宅へ連れて行かれました。書斎には、昔日本で作成されたという新品同様のバンドネオンが置かれていました。私は、日本でも一時期バンドネオンが制作されようとしたことがある、と言う話を聞いたことはありますが、まさかそんな珍しい物をどうやって入手されたのかと唖然としました。これとよく似た物をテレビで見たことがあります。それは両側のボタンのある部分が濃いブルーで、蛇腹が薄紫色でしたか、北ヨーロッパのリトアニアを取材した旅番組の中で、年配の男性が街角で弾いていました。曲はタンゴではありませんが、恐らくクロマティックでしょう。その夜は例によって、沢山の珍品ＳＰレコードを聴かせて頂いたことは申すまでもありません。翌朝、家内の待つ宿泊所に送り返して頂きました。振り返ってみれば懐かしく思い出されます。

大阪タンゴ・クラブの例会でも遭遇しております。その日は東京から寺田様（理髪店経営）がFco. カナロ最盛期の珍しいＳＰ盤を沢山持参し紹介されましたが、芝野氏はオーディオ装置の操作を担当されヘッドフォンで聴きながら全曲録音し、コピーを私にも下さいました。氏は最近まで、「自分はＣＤ、ＤＶＤやパソコンの事は一切判らないから何もできない」と語っておりましたが、実際は音響機器などに関してかなり精通されているようにお見受けしました。

氏がバンドネオンの練習を始めたのはいつ頃か私はお伺いしたことはありませんが、恐らく50歳を過ぎてからではないでしょうか。「六十の手習い」と言う言葉がありますが、それはあくまで“目標や理想を求めて終生希望を失わずに努力しなさい”と言う励ましの言葉に過ぎない、と解釈し、むしろ人生の実態は“鉄は熱いうちに打て”の諺のように、何事も時機を失すれば容易に成就することはできない、と言うのが現実だと思っていました。ましてドレミファのキーの位置を覚えるだけでも一年かかると言うディアトニックとクロマティックの両方に氏はチャレンジされていたわけです。氏はご自身のタンゴ・オーケストラを組織され、バンドネオンを立派に演奏されました。ご自分では、「私は楽譜が読めないんだ」と控えめにおっしゃいましたが、そんなことをまともに受け取る人はいないでしょう。

撮影：山本雅生氏

また氏は演奏会、レココンでも司会や解説は大変お上手でした。選曲はもとより話し方も流暢で判りやすく、内容も極めて豊富で如何にしてこれほどの資料を集められたのか、感心するばかりです。しかしご自分から知識をひけらかすような姿勢は決して好まれなかったようです。内輪の小さな会場でのアストロリコ・ライブでも司会・解説担当でバイオリンの麻場利華さんがその場を和ませるために、演奏の合間に客席の芝野氏に屡々質問を投げかけます。氏がしぶしぶ的確なお答えをすると、彼女は感心した様子をされます。ただ、氏は彼女のサービス精神は理解されていたと思いますが、そのようなことはご自身の性分には合わなかったようです。

一方氏は大変几帳面な方でした。何かの機会にお便りをしますと必ずご丁寧な返書を頂き、私の好みを配慮された多様な珍しいタンゴのカセット・テープやＣＤをご恵送頂きました。「沢山のコレクションをお持ちですねえ」と言うと、決まって「いや、そんなに持ってないですよ」とお答えになるのが常でしたが。

芝野氏の遺された貴重なコレクションは、この先どうなるのでしょうか。すべてご遺族の意向に従うのは申すまでもありませんが、何か保存する方法は考えられないでしょうか。

群馬県の渋川市にシャンソン博物館があります。シャンソン歌手の故芦野宏さんが館長を務めていました。所蔵の古い音源をコピーして提供願えるそうです。タンゴにもこんな施設があって欲しい。しかし、民間や個人で斯様な施設を管理運営するのは容易なことではなく、やはり国や地方公共団体の仕事でしょう。国会図書館のように大規模でなくても、タンゴのコーナーを併設してくれる施設はないでしょうか。資料の整理や貸し出しは、所在地最寄りのタンゴ同好会会員がボランティアで参加する、と言った案はどうでしょう。さすれば全国で廃棄される音源のかなりの部分がそこに集まり、選別して余剰の物は廉価で希望者に提供することもできます。資源の再利用にもなり、新しいタンゴ・ファンの獲得にも効果があるかも知れません。

芝野氏は私の知らない色々な分野においてもひたすら純粋に情熱を傾けて精一杯密度の濃い人生を送られましたが、決して上手に世渡りをするようなことを好まれませんでした。したがって、ときにはお心の中を理解し得なかった場合もあったかも知れません。

しかし、芝野氏は私の人生において、最も尊敬する方でした。　合掌。　　（2012.11.16）

芝野大兄の想い出

山本　雅生

去る平成24年10月18日、病を得て加療中であった大兄が帰らぬ旅に出てしまいました。それは80歳の旅立ちで有りました。正式な追悼文などは島崎会長を始め、四国は丸亀市在住の冨田さんがお書きになられると聞いて居ますので、小生は全く個人的なお付き合いの一端を思い出すまま書かせて頂きます。

それは小生がタンゴと云う音楽に興味を持つグループが集まり、同好会として「中南米音楽同好会・大阪支部」としてレコードを聴いていると云うお話しを仄聞して、初めて足を運んだ大阪は法円坂の焼け跡に有った教員会館だったと記憶する昭和27年の事で有ったと思いますが、熊谷さん・杉本さん・森田さん・生野さん・宮川さん等と共に芝野さんが居られたのでした。皆さんの話している内容はとても専門的で耳に入ってくる言葉は大変高度なもので有りました。何回か通って行く内に皆さんとお話しが出来る様になり、親しくして頂いたのですが、特に芝野さんとはよくお話しをさせて頂きました。

そうこうするうちに鉄道フアンである小生が購読をしていた「鉄道模型趣味」と云う戦後発刊の趣味誌では現在まで続く最も歴史の有る雑誌の〔No67号－昭和29年3月号〕に「幌點亜（ポルテニア）鉄道」と云う記事が発表され、何とその記事を書かれたのが芝野さんだったのです。記事の内容としてはブエノスアイレスよりロサリオ行の急行列車のお話しで、その中には「フレセドのエル・エスピアンテ」や「フィルポのエル・ラピッド」「ダリエンソのエル・トレン・デ・ラス・オンセ」等タンゴの有名曲が出てくるのです。当時芝野さんが作っていたＳゲージ模型の事にも触れ、既に鉄道・タンゴの趣味としてかなりハイレベルな趣味人で有った事が判ります。蛇足・・カメラは「プレス バン」を使っておられました。

打ち合わせをした訳でも無いのに、奇しくもその同じ号の実物便りに小生が神戸市電1100型の新型式についての記事を投稿していたのも何かの縁だと感じた処です。

趣味に対する取り組みにも色々なレベルが有ると思う

若き日の芝野さん。
「加悦鉄道」天橋立近辺（現在は廃線になりテーマパークＳＬ広場にこの機関車は保存されている）にて。
昭和38年４月28日
撮影：筆者

のですが、小生はこれを「極道」と「道楽」に分類して「極道」とは書いて字の如くその道を究めた凄い人、「道楽」とは何となくその道を楽しんでいる人と思っているのですが、丁度それは芝野さんと小生の対比としてピッタリと思っています。芝野さんと小生は昭和７年生まれの申年なんですが、芝野さんは早行きで学年は一年上と云う事になります。ですから以後は通信の時などには「芝野大兄」と書く事にしたのです。

昭和34年頃、大兄は阪急沿線の園田と云う高級住宅地に新築のマイホームを造り、新婚生活を始めたのですが、生活家財道具などは揃えたものの、極道材料のレコード（ＳＰ）を運んでないので運んで欲しいと云う依頼を受けて（当時小生はオースチンＡ40と云う車に乗っていた）ガタガタ道の西国街道を経て鴨川近くのお屋敷まで運びに行ったのです。何しろ異常な目方でスプリングがへたってしまい、のそのそと時間を掛けて園田まで走ったのも懐かしい想い出です。

昭和38年秋には数名の仲間と共に京都府日本海側の天橋立近く「加悦鉄道」へ明治７年大阪―神戸間で初めて走ったＳＬを見に行こうと云う事になって福知山の「北丹鉄道」「一円電車」「国鉄宮津線」などを巡ったのでした。その後関西地区で「鉄申会」と云う鉄道愛好家の仲間にも同席をさせて貰って長く行動を共にして楽しんだのも懐かしい想い出になりました。

現在、関西を拠点に関東にまで活動の幅を広げて頑張っている門奈紀生さんの率いる「アストロリコ」と云うタンゴ楽団が結成されて活動を始められた時、早速「アミーゴス・デル・モンナ」と云う応援団体を結成されて機関誌（1992／７／１　No.１）を発行し、各地でのコンサートの開催を支援され又、アストロリコがアルゼンチン・チリ・ウルグアイへ演奏旅行に行かれた時は、楽団を引率して観光旅行にまで頑張られるスーパーマン振りを発揮されたと聞いています。

又、他人様の演奏を聴くだけではなくて、何とか自分の楽団を組織して演奏をしたいとの欲望から「ロス･チャムージョス」と云う楽団をでっち上げてしまい、自らバンドネオンを弾いて？？各地で演奏をして回ると云うスーパーマンでも有りました。楽団の別名は「年金楽団」と称して頑張る姿は大変微笑ましいものが有りました。只こっちの都合などお構いなしに遠い処でも聴きに来い！と命令をされるので、狼狽える場面も時には有った様です。特に困ったのは突然歌を唄えと命令をされる事でした。「カミニート」とか「ア･メディア･ルス」の様なタンゴならまだしも、それも全く関心のない「吾亦紅（ワレモコウ）」とか「千の風になって」等と云うおよそタンゴとは無関係の歌でした（勿論、断固断りました）。

ロス・チャムージョスの皆さん

撮影：筆者

大兄が残された大きな遺産としてヨーロッパ盤のこだわりが有ります。タンゲアンド誌に残された大兄の原稿は他の追随を許さない優れた功績で、その拘りは「極道」そのものと思います。関西リンコンを立ち上げてその第2回（1998・4・18）では縦振動のレコードなるものを聞かせて下さいました。一般のＳＰレコードでは音の溝が左右に振れて音を記録するのを、溝の深さで振動をして音を記録すると云うもので、参加をされた皆さんも初めて目にし耳にすると云うゲテも

ので、針なども先が小さな球形になっている見た事も聞いた事も初めての珍しい物でした。曲は「クンパルシータ」と「カミニート」でした。クンパルシータと云えば大兄は必ずクムパルシータと拘りました。

小生の所属する「神戸ポルテニア音楽同好会」と、大兄に大変御世話になったお話しをさせて頂きます。阪神大震災からしばらくして街も復興に向けて頑張っている1998（平成10年）秋口に地元のラジオ局「ＡＭ神戸（ラジオ関西）」から10月からのワンクール（６ヶ月）深夜にタンゴの放送をやらないか？と云う話しが舞い込んで来たのです。打ち合わせをしている内に（オモロイ）と云う事になってやらせて貰う事にしたのですが、６ヶ月26回の放送を続ける事は私達の力量では大変！と云う事になって、ここは古い付き合いの「極道」の出番だと早速大兄に事の次第を連絡した処、快諾を得て始める事になったのです。

夜中の１時（25時）からの30分番組でしたのでタイトルを「深夜のタンゴ喫茶店」と決め、テーマ曲をアストロリコの演奏する「カフェ・ドミンゲス」として、最初の番組は「道楽」から「極道」に宜しくお願いをしますと挨拶をして、最後は御世話になりましたと御礼を述べ、その間24回は「海の見える放送局ＡＭ神戸から・・・」と云う迷セリフで始まる（実際は全く海の見えない旧館の犬小屋の様なスタジオ）

番組では私達の同好会は勿論、アストロリコのメンバー・姫路・和歌山の仲間達を交えて対談形式で進めて行ったのです、そして毎回最後の曲はラ・クムパルシータで締めくくる趣向でありました。

今回この原稿を書くにあたり、全曲を聴いたのですが、放送の中で云って居られた様に170曲を越える曲の中には他では聴くことの出来ない貴重な音源が使われて、流石「極道」の本領発揮と云う凄い内容で、大兄に「マスター」をやって頂いて良かったと思っています。阪神淡路大震災の時にはあの交通途絶の時、夜遅く帰ってきましたら玄関の戸に「災害お見舞い」を挟んで下さった事など大兄の優しい心遣いに大感激をしたのも忘れる事の出来ない想い出です。

余談になりますが大兄の食べ物について書きますと、全く魚が駄目で肉食専門の様でしたが、以前神戸は元町駅前にあった「円山」と云う中華料理店のラーメンがお気に入りで良くお誘いを受けました。そのお店が逼塞をして山陽電車の西代駅近く（小生の家の近く）に移転をしてからもわざわざラーメンを食べに通っておられました、（必ず２杯を食べていました）

正式に大兄のコレクションを見た事は有りませんが、それは日本でもトップクラスの物と想像をしますし、特にヨーロッパ盤についてはNo. 1だと思っていますが、あの“極道カンピューター”亡き今となっては全てを解読するのは並大抵の事では無いと思います、逸散をしない様、万全の手当が必要です。

そんなこんなで山ほど有る想い出の中から個人的な想い出に残る出来事を並べて見ました。大兄からは毎年アルゼンチンの鉄道写真を使ったカレンダーを頂いて居たのですが、最後に頂いたプレゼントは大井川鉄道のパンフと絵はがきのお土産でした。（大事にコレクションとして保存しています）

金澤蓄音器館の名物

タンゴ SPレコードコンサート

松本 外司（石川県・金沢市）

館長八日市屋典之氏
撮影：筆者

戦前、金沢一の繁華街で「芝居小屋」や「ダンスホール」それに「東」と「主計町（かずえまち）」の廓があり、賑わいの中心地だったところに「金澤蓄音器館」があります。現館長の父、八日市屋浩志氏が、現「館」の近くでレコード店を開き、その折蒐集した蓄音器やＳＰレコードを、後に金沢市が譲り受け2001年７月に「金澤蓄音器館」が開館しました。全国の愛好家からの寄贈もあり、現在蓄音器600台、ＳＰ盤レコード3万枚を保有し、１日３回実際に蓄音器を鳴らして入場者に聴いてもらう「聴き比べ」を11年間続けており、又現館長八日市屋典之氏が貴重な音源を7000枚も、保存を図っている専門機関に無料で提供していることに対して、日本オーディオ協会の「音の匠特別功労賞」に選ばれました。好評の「聴き比べ」はエジソン社製の蝋管蓄音機に始まり、縦振動、ラッパ付き、HMV194、バレンシア、クレデンザ、EMGエキスパートシニアなどを使用、我が身を削りながら、新しい音を聴かせてくれます。ＳＰ盤の魅力は一言で言えば「リアル感」です。その音色がそこであたかも弾いているように感じを受け、「聴き比べ」を体験した方々からは「柔らかく、生きているような･･･」「目の前で歌っているよう・・・」と感想を寄せられ、又、デジタル音源の配信の仕事をしている二十代の女性は豊かな音に衝撃を受け、「こんな音を伝えたい」と目を輝かせ、八日市屋館長は「ＳＰ盤は命を削りながら音を出している。昔を懐かしんでもらえばいいが、それだけではなく、新しい音として若者に伝えたい」と意欲を燃やしています。

この11年間「聴き比べ」を続けている「金澤蓄音器館」で、それに負けずに、アルゼンチン・タンゴのＳＰレコードコンサートが毎秋続けて行われているのをご存知でしょうか。「日本タンゴ・アカデミー」会長の島崎長次郎氏が、コレクションの中から毎回選りすぐりの銘盤を持参して、タンゴ・ファンを喜ばせてくれています。主に「クレデンザ」と「HMV147」を使用しますが、毎年趣向を凝らした選曲で、参加されるタンゴ・ファンには、たまらない時間となっています。一例として2005年３月「200分耐久レコードコンサート」と題して、名曲「ラ･クンパルシータ」を47曲聴き比べ、３時間20分を越す長時間にもかかわらず、参加者は座席に釘付けになって動けなかったという凄まじいことがありました。これも蓄音器から流れる素晴らしい音色のタン

ゴの魅力でしょう。

もう一つご紹介しましょう。2011年秋のコンサートは“フランシスコ・カナロ来日50周年記念”「ＳＰで聴くタンゴ史を飾ったカナロの軌跡」のタイトルで、１部ではカナロの作品からO・T・ビクトルの「エル・チャムージョ」に始まり、フィルポ４重奏団の「マタサーノ」、O・プグリエーセの「最後の杯」、２部はカナロ楽団の名演の中から、特に際立った1924年からの10年間の優れたものをたっぷり鑑賞しました。ラッパ吹き込みの「カスカベリート」「グローリア」「ソーロ・グリース」「できるならついておいで」「チケー」など全盛期の８曲、贅沢過ぎる選曲でした。３部では、カナロが得意とした「音楽劇」そして全盛を誇った1932年から10年間の作品からR・カナロの「中心街の若者たち」「テ・キエロ」「フェリシア」「さらば草原よ」「エル・アコモード」などを鑑賞しました。

島崎氏はアルゼンチン・タンゴについての豊富な知識を、初心者からベテランのタンゴ・ファンにまで、わかりやすくユーモアも入れて的確に解説されるのでファンも多く、当金沢ではコンサートが終わると、「では又、明年をお楽しみに待ちましょう。」の館長の挨拶が恒例となっていますが、これが11年も続いているコンサートの持つ秘密と言えるでしょう。

又、このコンサートには、各地からタンゴ・ファンが来られますが、ＮＴＡ会員の方だけでも、11回で延べ200名参加され、その内訳は、関東方面140名、関西、中部方面40名、その他20名を数え、毎回参加されている方々の他に、提携を深めているアルゼンチン協会の中野、寺本両理事、ＮＴＡ飯塚副会長、齋藤編集長などの諸氏がおられます。

そしてコンサート後のお楽しみも見落とすことが出来ません。新鮮なお魚が売りの金沢の寿司店での懇親会、カラオケ（タンゴ・ファンのもう一つ別の素顔がご覧頂けます）、翌日は市内観光をしたり、最近は観光バスで能登方面へ賑やかに繰り出し、本年は参加者のご希望により福井方面へ足を延ばし「東尋坊」「永平寺」方面を計画しています。又、この「タンゴ・ツアー」には欠かせぬ方がおられます。それは会員（理事）の弓田綾子さんで、旅程表作成からJRチケット、ホテルの手配、会員の引率まですべてこなされて、毎回事故もなく楽しいタンゴ・ツアーとなっているのも偏に弓田さんのおかげです。

2012年10月　撮影：吉澤義郎氏

ところで１月の新聞紙上で、12年度のＬＰレコード生産が再燃して前年の倍増となりその数42万枚、と載っていました。ジャズやロックの名盤が相次いで復刻され、ＣＤやインターネット通信にはない臨場感がファンに受けていると報じています。同様にＳＰレコードも当時の名手たちが残した最高の録音が吹き込まれています。タンゴ・ファンに永く聴き続けられているのも、当然のことでしょう。

11年度発売のＣＤもピーク時の1998年度の４億５千７百万枚の３分の１に急減、ＬＰ、ＥＰレコードを駆逐した筈のＣＤも、インターネット普及の影響で翳ってきています。ＣＤ,ＤＶＤの

寿命は保存状態のよいところで精々100年と言われています。その点を考えれば、ＳＰレコードや蓄音器は発売されてからの年月を考えれば、100年経っても、なおしっかり「アルゼンチン・タンゴ」の真髄を聴かせてくれます。それだけに、ＳＰレコードや蓄音器をさらに大切にしていきましょう。

タンゴ愛好家が集うこの金澤での恒例の「タンゴのＳＰコンサート」ですが、実は前段に次の様な記念すべき下地があったことを忘れることが出来ません。それは今から11年前の2002年の春のことです。兼六公園近くの「常福寺」でのこと、音楽に理解のある住職さんのご好意で日本タンゴ・アカデミーの“北陸の集い”を開かせて貰いました。要するにナマでタンゴを楽しもうというのが趣旨で、当時活動を始めたばかりの「エル・ビエント」４重奏団を招いての開催となりました。地元の人々を含め、ともかくファンで一杯になる盛況で、その後の懇親会を含めなんとも楽しい一夜になりました。全国各地から駆けつけてくれたＮＴＡの会員の顔ぶれは凄く、およそ20名ほど。野村敏彰夫妻（延岡）をはじめ、角田昭夫妻（京都）、丹羽宏夫妻（四日市）、吉岡達郎夫妻（四日市）、関村幸治夫妻（羽村）、國松尚一（新城）、芝野史郎（草津）、山内富夫（大阪）、永福無蘭（七尾）、それに役員の島﨑長次郎、高野利雄、蟹江丈夫といった錚々たる面々で、今振り返ってみればそれは見事この上もなしといった感じでした。

こうしたタンゴの熱気が、当時開館して注目され始めた「金澤蓄音器館」に収斂され、その後、名物の「タンゴのＳＰコンサート」に繋がって行ったのはごく自然のことだったと言えるでしょう。多少なりともそのお手伝いが出来るのは、私にとっても極めて嬉しいことであり、これからも出来る限りのことはさせて頂くつもりでありますので、会員の皆さんもお友達などお誘い合わせの上、是非観光を兼ねてコンサートにお出かけ頂きたいと思います。

金沢タンゴの集い　2002.6.15（土）　金沢市常福寺

後列左から　●芝野史郎（草津）、野村夫人、関村夫人、國松尚一（新城）、関村幸治（羽村）
中列左から　角田昭（京都）、丹羽夫人、●蟹江丈夫（監事／文京）、吉岡達郎（四日市）、野村敏彰（延岡）、山内富夫（大阪）
前列左から　角田夫人、丹羽　宏（四日市）、高野利雄（理事／文京）、松本外司（金沢）、島﨑長次郎（理事／浦和）、●深和泰三（美濃）

＊住所・役職名は当時　●故人

関西外国語大学イベロアメリカ研究センター

“タンゴの歴史を訪ねて” 第６回に思うこと

山本　雅生

谷本記念講堂入口

2012年10月31日大阪枚方市にある「関西外国語大学」谷本記念講堂で行われた“タンゴの歴史を訪ねて”と題するアルゼンチンタンゴ・コンサートを楽しみに行って参りました、以前2007年５月10日第３回の時に大澤寛さんのご紹介で初めて参加をさせて頂いて以来、これで４回目になった訳ですが、神戸から交通機関を５回も乗り継いで片道２時間の道のりを頑張ってもこの様な素晴らしいコンサートはそうあるものでは無い感激の凝縮されたコンサートでありました。

以下度々参加をさせて頂いた門外漢としての感想を述べさせて頂きます。

１　全国に国公立・私立を合わせてどれ位の外国語大学が有るのか寡聞にして知りませんが、この様な企画・催しを継続している大学など、他では聞いたことも無い素晴らしい催しであると思います、しかも閉ざされた学内だけの催しでは無く、広く一般に公開をして私達の様な外部の人間を快くお招き頂ける等と云うのは、本当に嬉しく凄い事と思います。

２　タンゲアンド誌2009年１月号にも書かせて頂いたのですが、コンサートの行われた「谷本記念講堂」は大変立派な建物で、広いステージと1,000人以上は収容できる様な近代的なホールで、音響装置も一流コンサートホールと同等・それ以上と思われる素晴らしい設備が備えられている様で、流石！と感心させられたのでした。

３　しかも第３回の時は「ロス・マレアードス」それ以後は関西を中心に関東、本場ブエノスアイレスに迄も活躍の場を広げている「アストロリコ」の演奏、歌手にはかつてブエノスアイレスに在住をし本場で磨いた歌唱力と語学力を駆使してタンゴの心を伝える「Sayaca」（当会会員）、

本場アルゼンチンで高い評価を得て活躍をしているダンスカップル「亮＆葉月」などの素晴らしいアルティスタ等を招聘して、質の高い優れた本場の心を伝える企画には頭の下がる思いで一杯です。

アストロリコと小生は楽団結成以来、７月９日直近の日曜日に開催をしている神戸ポルテニア音楽同好会主催のオルケスタ・アストロリコの定期神戸公演を始め色々な形でコンサートを楽しませて頂いていますが、コンフントとは云えあの谷本記念講堂のホールと雰囲気は特別で、殆ど神戸から出る事の無い爺さんでもこれだけは特別で、イソイソと出掛けています、序でですが必ず食堂に寄って学食をいただくのも楽しみにしています。

最後に思うのですが、聴衆には立派な学者風の人、外国人（全部が亞国の人では無いと思う）も沢山居られますが、肝心の学生の参加が少ない様に感じるのは小生だけでしょうか。スペイン語学科の学生さんが受付を手伝っているのは毎回見かけるのですが。

今後も生きている限り老骨に鞭を打って、このコンサートには参加をさせて頂きたいと願っております、末永く続けて下さいます様願っております。

またひとつ消える老舗
高田馬場ムトウ楽器店

クラシック、ジャズ、落語、歌謡曲そしてタンゴ！　優れた品揃えで長年タンゴ愛好家の巣であり故郷だった「ムトウ」が４月30日閉店した。当会会員田原陽次郎氏が尽力され築き上げられたタンゴ部門を振り返ると哀惜の想いを深くされる方々が多いだろう。（大澤）

エンリケ・クッティーニ楽団に歌うグロリア米山

弓田　綾子

2012年11月22日（木）、江東区住吉の「ティアラこうとう」で、エンリケ・クッティーニ楽団の演奏会があった。

“TANGO EMOTION”と銘打ったメンバーには、鍵盤の魔術師といわれ多くの聴衆を魅了してしまうマエストロのエンリケ・クッティーニ（Pf）を筆頭に、マルティン・セバスティアン・ゴンサーレス（Vi）、ニコラス・ライノーネ（Cb）、ハビエル・サンチェス（Bn）、歌手のマリオ・ファリアス、それに二組のダンサー、マリエラ・セレスエラとエルナン・セレスエラの兄妹組、ニコラス・マルティン・フィリペリとテレシータ・サンチェス・テラフら、今をときめくタンゴ界のスターたちである。そして、当アカデミー会員のグロリア米山が特別ゲストで出演し、華やかにステージを飾った。

第１部は「EL CHOCLO」の軽やかなリズムにのって幕が開いた。ステージ左側に置かれたピアノは、小柄なクッティーニが満面笑みを浮かべながら弾いていたが、その指はまるで鍵盤の上を踊っているようで、彼の指先に聴衆の目が釘付けになった。

マエストロ・クッティーニとグロリア米山

そんな会場に響きわたるピアノに乗って、甘いマスクのマリオ・ファリアスが「EL DÍA QUE ME QUIERAS」を切なくも情感込めて歌い、そして、グロリア米山が得意の「LA MOROCHA」と「DÉJAME」を見事に歌い上げた。さすがグロリアとは20年来の親交あるクッティーニだけに息もピッタリだった。

グロリアの歌には芸大で学んだ邦楽（琴）の“ため”の術が、その歌唱の中に発揮されていた。また、ながいこと培ったスペイン語や透き通った高音は、そう、グロリア米山の魅力なのだ。しかし、ひとつ残念に思うのは、日本人誰にも共通することでもあるのだが、もう少し歌いながら視線や顔の表情に配慮したらもっと聴衆に迫れるのに…と、感じられ

たことである。表情もかけがえのない言葉の一つなのだから。
　ファンの一人としてグロリアのさらなる躍進を期待したい。

　今回19回目となるエンリケ・クッティーニの演奏は、彼の持つキャラクターともいえる“ショーマン・シップ”がいかんなく発揮され、独特なイントネーションで“みぃ～なぁ～さん、こんにちぃ～は。どぞぅ、手をたたいてくだぁ～さい”などと会場を笑いの渦に巻き込みながら、聴衆を大いに盛り上げてくれた。
　ただちょっと惜しいのは、じっくりと演奏に聴き入りたくても、ほとんどの曲にダンスが付いていたので、聴く者にとっては少々うっとうしく感じられる面もあった。
　当日のプログラムの主な曲は、「EL DÍA QUE ME QUIERAS（想いのとどく日）」、「MILONGUEANDO EN EL 40（華麗なる40年代）」、「EL CHOCLO（とうもろこし）」、「CANARO EN PARÍS（パリのカナロ）」、「LIBERTANGO（リベルタンゴ）」、「TANGUERA（タンゴ好きなお嬢さん）」、「LA CUMPARSITA（小さな行進）」など、親しみのある曲が多かったのは一般のファンのためにはよかったといえよう。
　エンリケ・クッティーニの軽やかなピアノタッチと小柄で人なつっこいキャラクターは、多くの日本の聴衆の心を捉え、さすが19年におよぶ来日歴を誇るアーティストの貫禄を示してくれた。
　グロリア米山の歌を含めて、20回目となる来年の公演が今から待たれる。

人生の中で“ほっと”するひと時を！
タンゴ・レコードコンサートを開催！

野口 義征（熊本県・八代市）

平成24年も押し詰まった、12月８日土曜日、“日奈久”という八代の温泉街に新しく出来た多目的施設“ゆめ倉庫”にて「アルゼンチンタンゴ“よりあい”レコードコンサート」を開催しました。当日の天気はそれほど悪くはなかったものの、施設が港沿いにあるため、寒風吹きすさぶ中の開催となりました。

この施設は、以前の米倉庫を改装したもので、建物自体は大きくなく、ミロンガをするのに丁度良い程度でしょうか。前方にテーブル席、後方をダンススペースにして、周りに８月のアルゼンチンデーin日比谷のときに大使館から頂いたアルゼンチン紹介のパンフレット、タンゴ倶楽部所蔵のアルゼンチンやタンゴ関連の本・雑誌・ＤＶＤなど、そして、メインのＬＰレコード50枚ほどをずらっと並べて展示しました。

午後２時から２時間程度のプログラムでしたが、前半をレコード鑑賞、後半を茶話会とし、参加者が聴きたいと思ったレコードをかけましょうという気楽な内容で、“よりあい”と題したのも、思い出や情熱と併せて、お茶菓子も参加者が持ち寄ってくださいという意味も込めてのことで、主催者は、場と材料を提供するだけというシンプルな企画でした。

そのように、気楽に構えていたんですが、当日は開催時間の30分以上前に福岡から第１号のお客さんが来られ、驚きました。八代にも縁のある方で、懐かしく思って来たとのことでした。その後も熊本市内からお越しいただいたり、人数こそ10名弱でしたが、タンゴの魅力を再確認させられました。と同時に、しっかりした企画をしないと申し訳ないという気持ちにもなりました。

ただ、ご高齢の方がレコード盤を見て、昔を懐かしみ感動されている姿を拝見し、思い切って開催して良かったと実感しました。

コーヒーを飲みながら、レコードと思い出話に耳を傾け、あっという間の２時間でした。

初めての企画ということで、運営や広報など不慣れな点が多かったのですが、今後もダンスとともに続けていきたいと思います。

最後に、このＬＰレコードをお譲り頂いた本会会員の福川靖彦様には改めてお礼を申し上げます。

当日、掛けた主なレコード

中南米音楽社　メルセデス・シモーネ「第２集　1931 ～ 1946」カンタンド他

アルゼンチンタンゴ愛好会　フアン・ギド楽団「テ・ビ・ジョラール」

アルゼンチンタンゴ愛好会　トドス・デ・フアン・ダリエンソ「Vol. 1　1935 ～ 1936」

タンゴの日を記念して、

アルゼンチンタンゴ愛好会　ブルンスウィックシリーズ「Vol. 7　フリオ・デ・カロ楽団」

2013. 3. 7

イラスト：松野初美さん

名古屋の夜に輝いた
ネストル・マルコーニのバンドネオン演奏

丹羽　宏

慌しい師走、12月13日の夜、マエストロ「ネストル・マルコーニ」は東京、神戸に続いて「名古屋市青少年文化センター・アートピアホール」に登場した。

他でもない。「バンドネオン・ヒーローズ」とは新しい世代のバンドネオン奏者・三浦一馬が名実ともに師と仰ぐ「ネストル・マルコーニ」との協演のキャッチ・フレーズである。凄いのは師弟関係にある両者が対等のシチュエーションのもとにソロ、ドゥオ、トリオが展開されたことである。なお、クラシック畑のピアノ奏者、フランソア・キリアンがトリオ演奏、そして三浦一馬とのドゥオに参加した。

このイベントに先立つ12月９日（日）の夜、私は東京・御茶ノ水の「山の上ホテル」のレストランにいたのである。四日市の「タンゴ月例会」の後半部を吉岡達郎さんと鈴木克比古さんに、会場整備を事務局に託して上京した。日本タンゴ・アカデミー役員懇話会に出席するためであった。

参加者が着席しセレモニーを終えて幾ばくも経たない頃、サプライズが起った。翌日に紀尾井ホールでの演奏会を控えている「マエストロ」が例のスマイルを浮かべながら、バンドネオンを抱えて何と会場に現れたではないか。再乾杯し自己紹介が一巡した頃、徐にサイド･スペースへ移動して「ミ･レフーヒオ」を弾き始めた。更に自ら求めたリクエストには島﨑会長からの「ラ・クンパルシータ」に応じた。参加者有志のバイレも入るというマエストロ・ペースの雰囲気作りは流石であった。

於：山の上ホテル
撮影：吉澤義郎氏

これが誘い水となり、未だ内外で遭遇していない「マエストロ」のライブ・ソロを何曲か聴いてみたくなった。翌朝、住まいの近い名古屋公演をホテルからリザーブしたことは言うまでもない。

ここで、曲がり道した話を冒頭の「バンドネオン・ヒーローズ」のコンサートに戻そう。

長いステージの静寂を破り、第一部が始まった。快適なテンポから入ったトリオの演奏は「モーダ・タンゴ」であった。２台のバンドネオンとピアノという寧ろ変則的な楽器構成ながら、第一級のアレンジャーの手に掛かると、音数が豊富で骨太な自作自演に変身していた。会場の過半の席を占めた、タンゴ以外の音楽ファンにとって三浦一馬の師匠「ネストル・マルコーニ」の音楽イメージを感じ取るに十分な演奏となったに違いない。

２曲目、ここからのプログラムは「マエストロ」のバンドネオン・ソロとなる。会場で初お披露目される瞬間である。若手演奏者にも採り上げられることの多い「ラ・ボルドーナ」。1950年代屈指の名器楽曲をバンドネオンが都会の憂愁感を訴えるかのように奏したのにはうっとり。

次はアニバル・トロイロの歌のタンゴ、２曲へと続く。「スール」と「ラ・ウルティマ・クルダ」である。

「スール」はオメロ・マンシによる古き佳き時代のタンゴ回顧が満載された詩情を、バンドネオンが数分近くかけて歌い上げていた。続いては「トロイロ＝グレラ４重奏団の演奏」や「アストル・ピアソラのバンドネオン・ソロで歌うロベルト・ゴジェネチェ」の名演・名唱もある「ラ・ウルティマ・クルダ」。これら先人たちの残した味わいとは違った「しずむ心を歌うバンドネオン」の醍醐味を堪能することが出来た。

以上の３曲であるが、「マエストロ」のソロ演奏がジャズでは当り前のインプロビゼーション風に進行したので新鮮さと共に心地良さに酔うことが出来た。客席側が演奏に乗れたのも頷ける。

なお、会場配布のプログラムでは３曲目の題名がガルデル＝レ・ペラの「クアンド・トゥ・ノ・エスタス（あなたの居ない時）」と記されていたが、演奏されなかった。前述のトロイロ作品２曲に変更されていた。

続く５曲目は「マエストロ」の新作品で日本では初演となる「ロブスタンゴ」である。
Robusto（ａ）は〈がっしりした、頑健な〉という意味なので、合成語なのかも知れない。初めて聴く曲がソロ演奏だったので、序奏部分では今ひとつといった感じがしていたが、リピートで曲の構成が分かるにつれて美味しいパーツが盛り込まれたスケールの大きい曲であるように感じた。是非、トリオなどへのアレンジで聴いてみたくなった。

そして、最後は期待していた１曲、「アストル・ピアソラへのトリビュート」と名付けられた通り、単なる並のバンドネオン・ソロによる「ピアソラ・メドレー」ではなかった。

『採り上げた曲をある程度解体した上で、「マエストロ」のイマジネーションによって再構築している』のであろうか。素材となる曲は「バンドネオンのための協奏曲（俗称：アコンカグア）からの二つのカデンツァ」、「天使の死」、「ロ・ケ・ベンドゥラー」、「デカリシモ」、「マリアのテーマ」、「ブエノスアイレスの夏」、「アディオス・ノニーノ」の７曲である。

これらはピアソラの超名曲であり、聴けば“それ”と分かるサビの部分を持っている。それをチラリチラリと小出ししながら、真綿でくるむような変奏をアドリブ風に流すと、次の曲へ何事も無かったかの如く繋げていった。「天使の死～ロ・ケ・ベンドゥラー～デカリシモ」の繋ぎ部分では、途中ながらブラボー！と言いたくなる感情を何とか抑えて乗り切った。

このような編曲と演奏を同時並行して進めようとすれば、もの凄い集中力を要するのではないだろうか。最終となる「アディオス・ノニーノ」が静かなフェード・アウトを迎えた後では、堪らなくブラボー！を発していた。

後半は、三浦一馬のバンドネオン、フランソワ・キリアンのピアノによるドゥオが主体となったプログラムが続いた。この辺りは紙面の都合もあり割愛することとして、アンコールの状況へジャンプしたい。万雷の拍手を受けてのアンコールは、「マエストロ」のソロで「ミ・レフーヒオ」。御茶ノ水のホテルで余興に聴かせて貰った曲がこの場でも冒頭に登場するとは。「マエストロ」も「アストル・ピアソラ」もソロでレコーディングしているので、いつでも聴けるとは言え感動しながら耳を皿にしていた。ここで、「マエストロ」はファンへの感謝のメッセージを話したが、その中で『三浦一馬さんという素晴らしいバンドネオン奏者を持つ日本の皆様は大変幸せで、我々がアルゼンチンからわざわざ来なくてもよいのでは！』との甘言を挟むことも忘れなかった。

２曲目は出番待ちの曲、「ラ・クンパルシータ」をトリオでリラックスして聴くことが出来た。だが、演奏前のコメントで「マエストロ」は、『これからの曲では三浦にチャレンジしてもらう』と言っていたのは何っだったのか？暗に曲中でのアドリブ演奏を指示していたのかも知れない。流石に師匠。

この段階になると、師弟顔合せのコンサートというプレッシャーのもとで緊張を強いられた三浦一馬も悠然として将に協演を楽しんでいるようであった。そして、最後の曲は、幕開けとともに演奏された「マエストロ」大曲「モーダ・タンゴ」。これは今回の３都市公演（バンドネオン・ヒーローズ）の“締め”とあってか、一層張り切った３人の演奏を楽しむことが出来た。　　完

1912年12月９日　於「山の上ホテル」
中央の白い上衣がマルコーニ

撮影：吉澤義郎氏

レコード・コンサート
ノチェーロ・ソイのSP特集を聴く

中村　尚文（東京・江戸川区）

年の瀬の12月に行われる「ノチェーロ・ソイ」（主宰・当会会員宮本政樹氏）の蓄音器によるレココンは恒例となり、今年で第３回目（平成24年12月23日）を迎えた。

正面中央には堂々と蓄音器の名器HMV163がコメンテーターの持ち寄る名盤を迎え撃つべく、今年も皿回しをお願いしている梅屋の梅田さんを従えて出番を待っている。第１部はタンゴ愛好家の方々９名によるＳＰ２曲選18曲です。午後の１時30分に始まったレココンは、想い出のレコード、愛聴盤、珍重盤を引っ提げて、古きは1926年録音のY FUE TU RISA（ホセ・ボール楽団）から1956年録音のREMEMBRANZA（O. プグリエセ）まで実にバラエティー豊かな曲が並んだ。更にコメンテーターの機知に富んだユーモアと熱弁が場を盛り上げ、予定時間を30分以上も超過して終了。９名のコメンテーターの内７名が日本タンゴ・アカデミーの会員で占められたのは、至極当然と言えましょう。18曲の選曲の内、オデオン対ビクターでは、さすがスター楽団の多いオデオンが圧倒、楽団別ではフランシスコ・カナロがピリンチョを含めると４名が選曲。黄金時代の楽団では欠かすことのできないフアン・マグリオ・パチョが２名。去る５月のレココン30名による１曲選では根強いファンのいるカルロス・ディ・サルリが４曲もプログラム入りしたが今回も２名３曲と相変わらず人気がある。

第２部は日本タンゴ・アカデミー島﨑長次郎会長による「黄金時代の二大レーベル対決」の12曲選。オデオンの先攻でオスバルド・フレセドのCUANDO LLORA LA MILONGAを皮切りにビクターでは渋いCOLOR DE ROSAのフリオ・デ・カロなどの名曲名演が続き、時の過ぎるのも忘れさせるほどの10曲であった。最後はLA CUMPARSITAの競演となり、オデオンはフランシスコ・カナロ（G-1933年）片やビクターはロス・プロビンシアーノス（G-1931年）の演奏で熱戦の幕を予定通り５時10分に閉じた。ＳＰレコードで聴く名演は圧巻であり、爽快感の残る一日でした。

オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ
第51回　リサイタル　レポート

鈴木 茂次（埼玉県・日高市）

年の暮れも押し詰まっての開催が恒例となっているオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダの第51回リサイタルが26日に行われた。昨年は50回記念として大学の大隈講堂で行われたが、今年はいつもの会場の四ツ谷区民ホールであった。このリサイタルは実質最上級生である３年生が退く前の総仕上げとまた後を後輩たちに託して行く意味を持つコンサートである。

開場と同時に入場したが受付は見覚えのある先輩たち（４年生？）に迎えられて、プログラムを受け取る。ホールに入ると既に音響ほか舞台のセットは終えていて、開演を待つばかりとなっていた。そして大変手を掛けて作成したと思われるプログラムを見る。まず曲目紹介欄では３部構成で、ここ数年踏襲している構成である。第１部が大編成で主として古典曲、第２部が小編成でピアソラの曲中心、第３部では再び大編成で古典曲と新しくレパートリーに加えた曲となっていた。また曲解説は部員が一人一曲の形で習得過程に感じた事なども加えたユニークなものであったが、次のメンバー紹介欄も一人が別の一人を紹介するという学生らしい表現方法のものであった。

ここに演奏曲目欄を記すと

<1st Stage>	<2nd Stage>	<3rd Stage>
（１）Payadora	（１）Sur : Regreso al Amor	（１）Melancólico
（２）Café Domínguez	（２）Milonga del Ángel	（２）Nueve de julio
（３）Felicia	（３）Il Pleut sur la Route	（３）Taquito Militar
（４）Desde el Alma	（４）Oda para un Hippie	（４）La Llamo Silbando
（５）Bahía Blanca		（５）Zum
（６）Organito de la Tarde		（６）Tango del Ángel
（７）LaYumba		（７）Recuerdo

かつてのティピカ・スタイル～標準編成が時代とともに他の楽器も加わって編成も変化し、このタンゴ・ワセダのように標準楽器構成を維持しながらの大編成で聴ける機会はほんとうに少ない。そんなことで第１部はなんともうれしい選曲である。それは第２タンゴ黄金期に活躍したビッグ・ネームの曲をそのスタイルで演奏することだ。（１）トロイロ、（２）ダゴスティーノ、（３）ダリエンソ、（４）（７）プグリエーセ、（５）（６）ディサルリとあり、今日はそれらを再現して

くれると期待が高まる。

幕開けはＪ・プラサの“Payadora”からであった。バンドネオン４、バイオリン５、ヴィオラ、チェロ各１、ピアノ、コントラバス各１の13人でオープニングにふさわしい華やかな演奏であった。そしてＭＣで登場したのは我タンゴ・アカデミー副会長飯塚久夫さんで、以後その博識と明快なトークで快調な進行となっていった。楽団の編成はピアノとコントラバス、ヴィオラ以外はバンドネオン２～５、バイオリン５～６、チェロの有無と変わるが、ティピカ・スタイルの音を聴かせてくれた。曲は“Café Domínguez”、“Felicia”と続くが、その演奏スタイルは全て伝統あるこの楽団の先輩たちが引き継いできたものであり、期待どうりの演奏であった。５曲目は美しい旋律のワルツ“Desde el Alma”で選曲はバンドネオン・リーダー加茂俊平であり、短いパートながら彼をフーチャーしたものだった。続く２曲の“Baíha Blanca”、“Organito de la Tarde”はディサルリ・スタイルのセンテイミエントとダイナミックさを併せ持つ演奏スタイルに迫ったものになっていた。そして第１部の終わりはタンゴ・ワセダが今年の標榜としたプグリエーセ・スタイルの極み“La Yumba”であったが、そしてこの曲を３年生たちを中心にジュンバ、ジュンバと熱のこもった演奏で第１部を終えた。

撮影：筆者

第２部の多くをピアソラの曲で構成し１、２曲はメンバーを変えての４重奏だった。その１曲目はソラナス監督とピアソラのコンビの映画「南・その先は愛」から“Sur : Regreso al Amor”、これは３年生中心であったが、次のピアソラ天使シリーズから“Milonga del Ángel”は１年生だけのメンバーが演奏した。この演奏で終曲近くにうねるようなバンドネオン・パートのフォルテで、大三輪柚李の力強いサウンドに驚かされた。これから楽しみな新人である。次は司会者から、“さて今日のサプライズ”と紹介のプログラム外１曲はピアソラ晩年の大作ラ・カモーラ３部作の“La Camorra Ⅰ”であった。このリサイタルのためにアメリカ留学から一時帰国したというコントラバス大芝恵ら３年生の５重奏が、始めからなにか攻撃的な感じの曲想を持つこの曲を力演した、次は４重奏に戻り今日唯一のコンチネンタル・タンゴでシャンソンになったタンゴ“Il Pleut sur la Route”「小雨降る径」である。確か昨年もこの位置にプログラムされていたが、

わたくし的にはせっかくバイオリンが多数いるのだからそれを全部使って、弦楽器の音の厚みを出せる大編成スタイルで聴きたいと思ったりもしたが、昔、シャンソンを訳して「フランス小唄」と呼んだ人もいたので、その意味ではこれで良いのだとも言える。次の曲もプログラム外でエクトル・スタンポーニの歌の曲“El Último Café”を４重奏でしっとりと聴かせてくれた。第２部の終りはピアソラで９重奏の曲“Oda para un Hippie”で、私は初めて聴く曲であった。この原稿を書くためにそのＣＤを聴き解説を読むと弦楽器はコントラバス、チェロ、ヴィオラ各１、バイオリン２、である。しかし今回の編成はなんとバイオリンがプラス５の７人であった。ピアソラ作品もこの頃までのものはメロディーラインが親しめる曲があり、またもわたくし的には今回その弦楽器の音の厚みをして、それを顕著にしたと感じた。

第３部は再び大編成の演奏だが１部は伝統的に先輩から引き継いできたレパートリーであったのに対して今回初めて（編曲が）の曲で構成したという、またほとんどをバンド・マスターの赤松丈寛が耳コピーしたというのを知りえらいなと感じいってしまった。そして１曲目の選曲がまた良かった。フリアン･プラサの“Melancólico”だが、１部最初の曲は同じプラサの“Payadora”ではアルゼンチンの雄大な大草原パンパに思いを馳せる曲に対して、これは大都会ブエノスアイレスの憂愁を思わせる曲である。その対比がうまい。演奏もバンドネオン・パートのソロを１年柴田賢に弾かせるなどの場面あり、またこれからも楽しみである。次は古典の名曲“Nueve de Julio”はアストロリコの編曲で、ピアノ･パートがよく響くアレンジで演奏、続いての“Taquito Militar”ではフランチーニ＝ポンティエールのスタイルで、そのアレンジの良さを展開した。次はサルガンの“La Llamo Silbando”だが、これは赤松丈寛が今年渡亜してブエノスアイレスの「タンゴ学校」の演奏で聴いてからレパートリーに加えたという、サルガンの弾むようなリズム感をうまくこなして聴かせてくれた。次はピアソラの曲をプグリエーセ･スタイルで聴かせる“Zum”だ。今年タンゴ・ワセダが標榜したプグリエーセ・スタイルの集大成とも言えるこの曲では加茂俊平がバンドネオン・ソロ・パートをクールに弾き、その次はピアソラの“Tango del Ángel”であったが演奏はティピカ・スタイルにこだわり続けたレオポルド・フェデリコのスタイルでドラマチックな演奏を聴かせてくれた。そしてプログラムの最後の曲は“Recuerdo”であったが、その前に引退する３年生を代表して幹事長の石川晴菜の挨拶があり途中声を詰まらせる場面もあったりして、我ながら思わず遠い青春の思い出が蘇るようで、目頭が熱くなってしまうのを覚えた。しかしその後、演奏ではほとんどアンサンブルの乱れのないものであった。

アンコールはダリエンソ･スタイルの“Loca”に続き定番の“La Cumparsita”だ。それはピアノ・パートのトレモロ奏法でタンゴファンお馴染みのエンリケ・ロドリゲス・スタイルだった。いかにも学生バンドらしい全員出演の演出は、ピアノ・パート４人は連弾にピアニカとバイオリン、コントラバス・パート４人は１人がバンドネオンにと、21人全員が司会者のメンバー紹介を受けながら、力一杯の演奏を展開した。今日、外はこの冬一番の寒さとなっていたが、会場は彼等の青春に思いを馳せた多くの観客たちが、この若者たちに送る熱い声援に包まれての終幕となった。

「ニコラス・レデスマ楽団公演を聴く」の記

杉山 滋一

2013年の民音タンゴ・シリーズは第44回にあたり、また折りしも民音創設50周年記念、日本アルゼンチン修好115周年という節目の年でもある。この時期に招聘したのがピアニストのニコラス・レデスマが率いる８人編成のオルケスタで、歌手１名、ダンサー３組を伴って１月16日から３月14日まで42回公演で国内各地を巡演する。そのうち１月18日、東京・中野サンプラザホール昼の部の公演を聴いてのレポートをする。

中野サンプラザ

ここ数回、この民音タンゴ・シリーズは“ドラマチック・タンゴ”という呼称を続けている。今回はそれとともに、特に目を引くキャッチ･コピーとして「新黄金世代の巨匠たち」が使われている。1940年代から50年代の約20年間の、いわゆる第２黄金期”はダリエンソ、ディ・サルリ、プグリエーセ、トロイロ、その他の楽団・歌手の活躍で、アルゼンチン・タンゴの大輪の花が咲いた。その後下降線を辿るがピアソラが新しいタンゴ表現として新境地を開き、再び注目されだしたタンゴ・ダンスの復活もあり今日に至っている。そこで第２黄金期の伝統文化と精神を引き継ぎ、在るべき新しいタンゴを担って巨匠たちの足跡を歩むこの姿を見て欲しいという意気込みを表明するキャッチ・コピーであるように感じられる。

メンバーを見てみよう。リーダーのニコラス・レデスマは重鎮レオポルド・フェデリコのもとで、ピアニスト、編曲者として研鑽を重ねてきた。脇を固めるのが現代屈指のバンドネオン奏者オラシオ・ロモと、バイオリンはピアソラの盟友であった名手アントニオ・アグリの息子の名前に恥じないパブロ・アグリ、それにレデスマとの付き合いも長く、ベースライン支え役はベテランのコントラバス奏者エンリケ・ゲラ（この人の参加は大きい)、それらを中核にした８人編成楽団である。それに華を添える歌手にマリア・ビビアーナ（ちなみにリーダー夫人とのこと）にダンサーはダンス世界選手権優勝のカップルを含む３組６人で総勢15人の大世帯での来日公演である。

第１部はレデスマが腕をふるう凝ったアレンジのカナロの名曲「ガウチョの嘆き」で幕が開く。続く「マラ・フンタ」はプグリエーセのスタイルで演奏されダンスが踊られる。３曲目はフェデ

リコ＝レデスマ共作「タンゴの夢」でレデスマのピアノ・ソロをたっぷりと聴かせるアレンジになっている。ここで４曲目に歌手のビビアーナが登場する。「ひとしずくの涙」を声量豊かに、のびやかな歌声が印象的に響く。つぎに曲種がミロンガに変わってアイエタの作品「コラレーラ」をテンポ良く軽やかな演奏に合わせて３組のダンサーが切れのあるステップで踊る。再び歌手ビビアーナの登場で６曲目「フエジェ・アミーゴ」が歌われる。この曲はバンドネオンの巨星アニバル・トロイロに捧げられたレデスマ2008年の作品で作詞は歌手のビビアーナである。したがって“自作自演自唱”ということになる。曲のなかに「トーダ・ミ・ビーダ」と「レスポンソ」のひと節が織り込まれていて、ビビアーナの歌も情感を込めじっくりと歌いあげる立派なパフォーマンスである。ここから２曲は1950年前後の作品で、原曲の趣をこわさずにメロディーを生かすことを重んじた編曲である。ゴビ作品「オルランド・ゴニ」とプグリエーセのスタイルでバルカルセの「シ・ソス・ブルーホ」が楽しめる。２曲ともダンスがつくが個人的好みを言わせてもらえれば、どちらか１曲はインストで聴きたかった。９曲目のバルディの「ティエリータ」が緩急を大胆に使った編曲でこの古典曲を新感覚なインストに纏めていてレデスマの力を推し量ることができる仕上がりになっている。続く10曲目「パリのカナロ」は軽快なテンポとリズムに合わせて２組のダンサーが鮮やかなステップを披露する。アレンジは2003年録音のＣＤ“タンゴ･ビア”をテキストにしていると思われる。そして第１部の終わりには“エル・チョクロ”など３曲のビジョルド名曲メドレーで盛り上げる。いずれも古典曲だけにテンポを早めにとって各人は目いっぱいのハッスル・プレーで聴衆に応えている。

第１部を振り返ってみると、自作が２曲の他は古典曲中心のプログラムである。

休憩をはさんだ第２部はガラリと趣を変えて２、３曲の古典タンゴを除けば近代の曲と自作を重点とした構成になっている。第２部の幕開けはピアソラの代表作「リベルタンゴ」で始まる。２曲目はダンス２組が参加してプラサ作「ノスタルヒコ」、続く３曲目にビビアーナの歌でガルデルの「想いのとどく日」が会場の拍手を受ける。かって1956年にバレラ楽団が録音して御馴染の「聴け、バンドネオンの調べ」が４曲目にバレラのスタイルで演奏され、ダンサー３組による踊りが華を添える。こまかな譜割りのバンドネオン・バリアシオンをロモが見事に弾きこなす。５曲目はちょっとしたサプライズで、本公演の中心メンバーであるレデスマ、アグリ、ロモ、ゲラの４人による四重奏団でレデスマ自作の「ルート７」（故郷のラ・パンパからブエノスアイレスに向かう国道）が取り上げられる。レデスマの音楽性、タンゴ性が良く出た作品で、各人とも思いおもいに腕をふるったプレーが満喫できる。今回の来日公演のためにレデスマが作曲した「虹の橋」

提供　ラティーナ

のあと、７曲目、８曲目はダンスナンバーの定番「ガジョ･シエゴ」（プグリエーセのスタイルで）と古典名曲「デレーチョ・ビエホ」が踊られる。９曲目で再びレデスマ自作の「ボイ・ア・ブエナ」をアグリの流麗なバイオリンが奏でる。トップダンス・カップルのカルラ＆ガスパルもモダン・バレーを思わせるような振付で観衆の目を引き付ける。終りが近づくにつれ、10曲目以降にピアソラ作品が３曲続いて演奏される。まずフェレール作詞「わが死へのバラード」をビビアーナが歌う。アメリータ・バルタールが1969年創唱した重く暗い内容の詩を、じっくりと噛みしめて語るように情感のこもった存在感のあるパフォーマンスを示し聴きごたえがある。さらに11曲目はダンサー３組が華を競うステップで「天使のタンゴ」を、フィナーレには「アディオス・ノニーノ」が各パートのソロをたっぷりと聴かせて幕が下りる。

アンコールは言わずと知れた定番御約束の「ラ・クンパルシータ」である。楽員各人のソロに続いて歌が添えられる。ダンサー３組の群舞を交えて総出演で盛り上げ、満場喝采のうちに24曲２時間余りのコンサートが終了する。

本公演は８人編成の楽団ということで、収容人員2200人の大ホールでもサウンド的には過不足はないが、両端部分座席の一部でＰＡに多少不満が生じるかもしれないと感じた。中央に置かれたピアノがやや抑え気味で右側のバンドネオンが強く出るように感じられたが大ホールでの音響技術の難しさか（？）。逆に四重奏団はちいさな会場で各プレーヤーの息づかいや、楽器の音の隅々までが聞こえることが望ましいが、入れ物が大きすぎた。また、来日後３日目の公演であるためか、多少アンサンブルに粗さが気になった。回を重ねるにつれて解消され良い公演となることであろう。歌手のビビアーナはまだまだ“伸びしろ”があり今後さらに期待したいものだ。同じことの繰り返しになるが、大ホールで声を張り上げるのでなく小振りの会場でしっとり聴いてみたい気がする。ダンスについては良く分からない小生だが、個人的好みで曲によってはインストで聴きたかった演奏があり、ダンサーが視界を横切ることに違和感を覚えることがあった。派手なジャンプなどで観客が目を見張ることもあり、それもショー・アップとしての舞台構成であれば否定することでは無いかとも思うが・・・。（歩くことで観衆を魅了した故ガビートのステージをふと思い出した。）

コンサートが終わって外に出る。成人の日の東京での７年ぶりの降雪が日陰に溶けずに残る道を足元を気にしつつＪＲ中野駅に帰路をとった。

2013.01.19　記

「いーぐる」連続講演第493回

「ジャズ・ファンに捧げるモダン・タンゴ名曲・名演」を聴いて

大澤　寛

３月９日（土）の昼下がり３時半からみっちり３時間、場所はジャズ喫茶の名門四谷「いーぐる」、山本幸洋さん（当会会員・実行委員）がジャズ・ファンに熱く語りかけるタンゴへの誘いを聴いた。

周到に準備された内容には、苦心と節度が伺われる。“モダン”と冠することでタンゴとは古いものという先入観念が払拭される。しかしこの言葉に引きずられ過ぎないでタンゴの歴史が正統的に語られたのは流石である。語り手の積み上げた知識・研究成果が豊富であるだけに、少し横道にそれて語りたいエピソードや今回の講演には入り切れないテーマや贔屓の演奏家・歌手はあっただろう。敢えてそれらを排除しての直球勝負だった。そしてプログラムの末尾に近づくと看板を裏切らない“これぞモダン・タンゴ”というべき演奏が紹介された。Vanguatrío の RECUERDO や J.J.Mosalini の自作自演 VIOLENTO、そして最後の Adrián Iaias の CHIQUILÍN DE BACHÍN はこれはもう完全にジャズ。そして山本さんの“タンゴ以外を外国で摂取したアルゼンチンの演奏家がそれらを取り入れたタンゴをアルゼンチンで演奏することの意義を考えたい”という言葉が印象的だった。プログラムの一部（ジャズとの年代対比および紹介されたタンゴの曲目が出ている部分）を次頁に掲載する。

ジャズの世界のお客の一人（女性。プエルトリコ在住経験あり。サルサの専門家？）がモダン・タンゴへの親近感を表明。また弓田さんが店に置いた NTA 入会の勧めのチラシも完全に近い消化率。山本さんの語りの効果が出ている。講演の後オーナーの後藤雅洋さんの発議で山本さんを囲む懇談会（お酒はオーナーから提供される）も開かれた。ジャズという別のジャンルに造詣の深い後藤さんから次々と質問が出る。それに弓田さん、大岩さん、西川さん、脇田さん（順不同。鈴木一哉さんは講演だけで退席）が熱心に答えて、和やかだが内容の濃い時間となった。

こうした企画が繰り返されることを強く希うものである。例えば女性歌手聴き較べ。Sarah Vaughan と Mercedes Simone は確か没年が同じ1990年の筈。夢が拡がる。この山本さんの講演にスポンサーがついて何処かのＦＭ放送で深夜に放送されたらいいだろうなという思いを抱えて「いーぐる」を後にした。

（2013年3月10日）

年代	*cf. ジャズでは*	*楽団名 or 歌手名*	エポック	楽団名 or 歌手名		曲名
20年代	*ディキシーランド オーケストラル*	*ルイ・アームストロング ウェスト・エンド・ブルーズ 1928*	黎明期	ターノ・ヘナロ		エル・エントレリアーノ エントレリオス州の人
			古典的名演	ルイス・ペトルチェーリ		ジェバーテロ・トード ぜんぶ持って行け
		デューク・エリントン 黒と茶の幻想 1927	革新	フリオ・デ・カロ		ボエード （土地の名）
			歌	カルロス・ガルデール	歌	マードレ・アイ・ウナ・ソラ 母はただひとり
				メルセーデス・シモーネ	歌	カンタンド 歌いながら
30年代	*スウィング*	*ビリー・ホリデイ 月光のいたずら 1935*	バイレ復活 古典復活	フアン・ダリエンソ		ラ・クンパルシータ カーニヴァルの行列
40年代	*ビ・バップ アフロ・キューバン ディキシー・リヴァイヴァル*	*ディジー・ガレスピー チュニジアの夜 1947*	歌謡 オルケスタ・ティピカ	アニーバル・トロイロ フランシスコ・フィオレンティーノ	歌	トーダ・ミ・ビーダ わが人生のすべて
				オラシオ・サルガン		レクエルド 思い出
				オスバルド・プグリエーセ		ラ・ジュンバ （ビートの擬態語）
50年代	*クール ハード・バップ ファンキー*	*キャノンボール・アダリー 枯葉 1958*		フランチーニ＝ポンティエール		タキート・ミリタール 軍靴の響き
			成熟	フランチーニ＝ポンティエール		タンゲーラ タンゴ好きなお嬢さん
	ディキシー・ リヴァイヴァル	*アート・ブレイキー＆ザ・ジャズ・メッセンジャーズ モウニン 1958*		藤沢嵐子	歌	ママ、ジョ・キエロ・ウン・ノービオ ママ、私、恋人がほしいの
				アニーバル・トロイロ		ダンサリン 踊り子
				カルロス・ディ・サルリ ホルヘ・ドゥラーン	歌	ヌーベス・デ・ウーモ たばこのけむり
60年代	*モーダル ボサ・ノヴァ サード・ストリーム フリー*	*マイルズ・デイヴィス ソー・ホワット 1959*	コンボ復活	キンテート・レアル		ア・フエゴ・レント とろ火で
				トロイロ＝グレーラ		シルバンド 口笛を吹きながら
			モダン～オルケスタ	オスバルド・プグリエーセ		ノスタルヒコ 郷愁
				ミゲール・カロー アルベルト・ポデスター	歌	ケ・ファルタ・ケ・メ・アセス 君なくて
		オーネット・コールマン フリー・ジャズ 1961		レオポルド・フェデリーコ		ドン・アグスティン・バルディ （人の名前）
				レイナルド・ニチェーレ		バイレ・デ・エティケータ
				セステート・タンゴ		ラ・ボルドーナ （ギターの低音（弦））
			ピアソーラの革新	アストル・ピアソーラ		アディオス・ノニーノ さようなら、お父さん
				アメリータ・バルタール	歌	バラーダ・パラ・ウン・ローコ ロコ（きちがい（男））へのバラード
70年代	*フュージョン VSOP*	*チック・コリア リターン・トゥ・フォレヴァー 1972*	モダン～トリオ	フェデリーコ＝ベリンジエリ		ラ・カチーラ
				バングァトリオ		レクエルド 思い出
			歌は郷愁	ロベルト・ゴジェネーチェ オルケスタ・ティピカ・ポルテーニャ	歌	ラ・ビ・ジェガール やってきた女
80年代～	*カオス？*	*マルグルー・ミラー ソウル・レオ 1987*	世界化	フアン・ホセ・モサリーニ		ビオレント
				アドリアン・イアイエス		チキリン・デ・バチン （お店の名前と少年の名前）

ニコラス・レデスマ楽団伴奏による 2013グラン・ミロンガ報告

池永博威（東京・練馬区）・大澤　寛

恐らく今年の第一四半期の悼尾を飾るイベントが３月16日、表参道スパイラルホールで行われた。今年の６月に開催が決定した第10回アルゼンチン・タンゴダンスアジア選手権の10周年を記念してのグランミロンガである。参加者総数は300人を超えていた。200人以上がダンス、残りが聴く人々という比率か。とにかく常に50組ほどが踊りを楽しむ姿が見られた。16時半開場、間もなくＣＤによるミロンガタイムとなる。選曲はHiroshi & Kyoko（2009年大会の日本人初のサロン部門優勝カップル）による。早速皆さん手慣らしならぬ足慣らしを始める。20曲がすぐに終わった感がある。

表参道スパイラルホール

そして３組のカップルのデモンストレーション。まず昨年のアジア選手権サロン部門優勝のMartín & Yukaが「Junto a tu corazón（君の心の傍で）」、次いでChizuko & Ezequielの「Watasi」そして最後はHiroshi & Kyokoの「Fruto dulce」。ここでニコラス・レデスマ楽団がフルバンドで登場。上記３組のカップルによる華やかな群舞はミロンガでCorralera。

そして待望の生演奏による贅沢なミロンガタイムが始まる。立ち上がりはピアノ（Nicolás Ledesma）・コントラバス（Enrique Guerra）・バンドネオン（Horacio Romo）のトリオで９曲目からバイオリン（Pablo Agri）が加わる。「Organito de la tarde」「El choclo」「Milonga de mis amores」「Felicia」など日本人の好みを知っての選曲だろう。そして会場全体からのstanding ovation に応えてのアンコールが２曲「El pollo Ricardo」と「El internado」。今回の訪日の最終公演とあって演奏には気合が入り、メンバーの間でも掛け声がしばしば飛び交う。

ミロンガ風景

撮影：大久保江梨さん

休憩の後、主催者（株）ラティーナの本田社長、Raúl Guillermo

Dejean駐日アルゼンチン共和国大使（ここで通訳の方のマイクに故障があったのは残念）そして飯塚久夫アジア大会組織委員会長の挨拶があり、さらに司会者から次回（第10回）大会の開催が６月22－23の両日と決定されたことのアナウンスが行われた。この大会に気軽に（！）参加して欲しいとの呼びかけの後、サロン・ダンス競技の注意事項の解説があった。ダンスの方々には先刻ご承知の内容だろうが“聴く”ことが主眼である方々のために記すと　①カップルは一度組んだら音楽の続く間離れてはならない　②ステージ・ダンスの様な危険な振り付けをしない　③カップルのどちらも膝の線より上につま先を上げてはならない、等。

19時を少し過ぎての第２部のスタートはＣＤを使ってのミロンガ・タイム。今度はMartín の選曲によるもの。そして再びフルバンドをバックに３組のデモ。まずYesica & Arielが「Gallo ciego」次いでMelina & Juliánの「Derecho viejo」最後にCarla & Gasparによる「Mala junta」。続いての歌はMaría Vivianaが情感をこめて「El día que me quieras」。最後にダンサー全員が登場しての「Sentimiento Gaucho」に場内はさらに盛り上がる。

撮影：町田静子さん

演奏がノリまくりだったのは、やはりミロンガと言う動きのある場所で参加者との間に生まれる一体感が生み出したものだろう。各プレーヤーのそれぞれのパートのソロも、持てる技量を出し切った感のあるもの。誠に“贅沢な”の一語に尽きる豪華なフルバンドによる最後のミロンガタイムは終盤の「Si sos brujo」から「Canaro en París」そしてアンコールの「La cumparsita」で会場の興奮は最高潮に達した。この曲が終わると舞台に上がったダンサーの面々や歌手に楽団メンバーが互いに抱き合い、飛び上がって喜びを表現。鳴りやまない拍手の中に終演が告げられた。

主宰者のご努力に敬意を捧げながら、こうした本格的かつ贅沢なミロンガが繰り返し開催されることを希い、そして６月の第10回アジア選手権大会の成功を心から祈念するものである。

（2013年３月18日記）

新・訳詩コーナー

大澤　寛

Charlemos（一緒に話しましょう）

L y M : Luis Rubistein

ベルグラーノの6011番ですね？　レネと話したいのですが
そこには居ないって？　いや　切らないでください
あなたとお話できますか？
切らないでください　淋しい午後です
私は涙もろくなっています
判りました　レネは死んだのですね
話しましょう　相手はレネでもあなたでもいいのです

話していれば　私は幸せなのです　人生は短いのだし
一緒に夢を見ましょう　雨が降るこんな暗い午後に
語り合いましょう　愛について　女と男になりましょう
そしたら　あなたの声で　私の残酷な苦しみが　ずっと和らぐのです
話しましょう　それだけです
私は　すぐに消えてしまう夢に囚われているのです
生きて見ることのない夢に
話しましょう　それだけです
あなたの声を聴いていると　ここ　私の胸は　新しい想いに脈打つのです

なんですって？　会わないかって？　ずっと夢のままでいましょう
お互いに知り合わないで　心と心で　語り合いましょう
会えない　私はあなたには会えないのです
苦しいことなのです　どんなにあなたを愛したいことか！
私は眼が見えないのです　済みません

出だしの電話番号は原詩では ¿Retiro sesenta once?（レティーロの6011番ですか？）だったのだそうです。偶々この番号が実在してレティーロ駅の交換台に“レネと話したい”という電話が殺到し、駅から抗議が出て書き変えたのだそうです（todotangoの記事から）

この歌を聴く度に故・芝野史郎氏と楽しい議論をしたのを思い出します。謹直な芝野さんから“この歌の中身はちょっと意味深長ではありませんかな”との電話が発端でした。2010年の３月でした。FAXのやりとりが残っています。堪らなく懐かしい想いがします。

歌はtodotangoで聴けます（ギター伴奏のIgnacio Crocini）そして歌詞はLetra-Dに出ています。ＣＤ　Di Sarli + R.Rufino「Sus Primeros Éxitos Vol.1」BMG 74321-41298-2）は今回も杉山滋一さんにご教示頂きました。

日本タンゴ・アカデミーの行事予定

◎中部リンコン　日　時：５月12日（日）13：30
　　場　所：「文化の諏訪駅」

◎東京リンコン　日　時：５月21日（火）18：30
　　場　所：「原宿クリスティー」

◎セミナー　日　時：５月26日（日）13：30
　　場　所：「東医健保会館」

◎関西リンコン　日　時：６月23日（日）12：00
　　場　所：「サロン・ド・あいり」

次号の原稿締め切り日

Tangueando en Japón（7 月発行）：5 月 31 日
Tangolandia 秋号（10 月発行）：9 月 30 日

編集後記

今号もご覧の通りの賑やかな目次となりました。皆様のご出稿に感謝いたします。いつものことですが頂いた資料・写真の多くを割愛し、長文をお寄せ頂いた方々には圧縮をお願いせざるを得ませんでした。

2006年秋号から08年秋号まで続いた「会員アンケート」を再開します。今度の対象曲は“Chiqué”です。皆様それぞれお気に入りの演奏を３つ選んで置いて下さい。応募の方法は現在検討中です　（大澤）

日本タンゴ・アカデミー副機関誌

「Tangolandia」（非売品）　第26号　2013年4月 発行

発　　行：日本タンゴ・アカデミー
〒156-0044　東京都世田谷区赤堤２－32－14－104（飯塚方）
電話＆FAX 03-3324-1989　E-mail　iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編　集　部：大澤　寛（編集長）〒162-0051
東京都新宿区西早稲田２－１－23－609
TEL＆FAX 03-3208-2247
E-mail　hdomingo@bc4.so-net.ne.jp
島﨑　長次郎・齋藤　冨士郎・弓田　綾子・西川　薫

表紙デザイン：脇田　冨水彦